

# 南武蔵における古墳終末期の様相

池 上 悟

- 
- |             |           |
|-------------|-----------|
| 1. 地域内古墳概観  | 4. 群集墳の様相 |
| 2. 横穴式石室の様相 | 5. 群集墳の類型 |
| 3. 横穴墓の様相   | 6. 群集墳の分析 |
- 

## 論文要旨

南武蔵地域に於ける古墳文化の特色は、三角縁神獣鏡を有する前期古墳、あるいは甲冑を有する中期古墳の所在も若干知られているものの、最大の特色は後期の群集墳の存在であり、就中横穴墓の集中的な造営である。

この後期の段階でようやく全域的に古墳の造営が可能となったものであり、集落址の調査などの成果を勘案すると、安定した地域発展の結果としての横穴墓の造営というよりも、むしろ唐突に高揚する群集墳の盛行状況を窺うことができる。しかもこの存在状況は個別横穴墓が無秩序に展開するものでなく、地区の首長墓と考えられる横穴式石室を有する高塚古墳との有機的な関連の下で造営されており、その性格を明示するものである。また地区を限り僅かに展開している横穴式石室墳の群集墳は、地区首長を直接的に支える支配的な立場にあった有力な集団を被葬者と想定することができ、横穴墓とは峻別される。

一体に地方における群集墳は、地域首長墓の衰退状況との対応でのみ問題にされる例が多い。しかし、これが解釈のみでは単純に過ぎ何等新たな問題の解明には至らない。群集墳は創出の要因により類別が可能であり、大きくは外的要因に基づく例と、地域の内部的要因が考慮される例であり、これは立地・埋葬施設・副葬品などの様相により区分できる。

群集墳はまた、一般的に武装した集団の墓とされる例が多い。しかし、南武蔵のみならず、広く東国で群集墳の主体をなす横穴墓の武器の出土状況を見てみると、高塚古墳とは大きく様相を異にする。武器の代表例としての鉄鏃は、勿論高塚古墳例でも出土しない例は僅かに認められるものの、東国の多くの横穴墓からは出土しない例が多い。出土する例においても高塚古墳との格差は極めて大きなものであり、圧倒的な支配的立場の相違を明示するものである。

## 1. 地域内古墳概観

南武蔵地域（現在の東京都および神奈川県の一部）における古墳は、東国の他地域と同じく前期よりの発展を窺うことができる。このうち特に注目されるのは、多摩川下流域の両岸に展開した古墳群である。北岸では大田・世田谷区域を中心に展開する荏原古墳群であり、南岸は横浜・川崎市域に位置する日吉・加瀬古墳群である。

荏原古墳群には全長100メートル級の前方後円墳である亀甲山古墳と宝来山古墳<sup>(1)</sup>が位置しており、この2基の前方後円墳が地区の古墳築造の端緒をなす首長墓と考えられ、内容の知られる宝来山古墳が4世紀の後半代、亀甲山古墳がこれに続いて5世紀の前半代までに築造されたものと考えられている。

南岸の日吉・加瀬古墳群<sup>(2)</sup>では、全長72メートルの日吉・観音松古墳と、全長87メートルの加瀬・白山古墳の2基の前方後円墳が地区初現の首長墓として確認できるものである。このうち白山古墳から出土した三角縁神獣鏡はこの地域唯一の出土例であり、著名な山城の椿井大塚山古墳と同範関係を有するものとして注目される。

この他の地区における同時期の古墳としては、多摩川北岸では宝来山・亀甲山古墳の上流約7キロメートルの地点に砦中学校第7号古墳<sup>(3)</sup>が知られる。全長65メートルの前方後方墳であり、この時代に副葬品の重要な位置を占めた鏡の出土は、径4.8センチの小形の珠文鏡のみである。

これを地域内の古墳出土鏡鑑と比較してみると、宝来山古墳は主体部である粘土槨が破壊から免れた部分での検出であるが径12.7センチの倣製四獣鏡のみであるのに対し、多摩川南岸の両古墳からの出土鏡鑑類は圧倒的な優位を誇る。加瀬・白山古墳からは中心埋葬施設である後円部の木炭槨からは、径22.4センチの三角縁神獣鏡と径10.3センチの倣製内行花文鏡、後円部の従属的な位置を占める北粘土槨からは径7.5センチの珠文鏡と径6.5センチの乳文鏡の2面の倣製鏡、更に前方部の粘土槨からは径4.4センチの櫛歯文鏡が出土している。また日吉・観音松古墳からは直径19.5センチの内行花文鏡のみであるが、銅鏃を伴出している。即ち、前方後方墳という特異な墳形の砦中学校第7号古墳よりの出土の鏡は、地域の盟主墳における従属的な位置を占める埋葬施設からの出土鏡に対応するものといえよう。

以上の副葬品に鏡鑑類を含む有力な古墳に対し、僅かな副葬品しか認められない古墳もこの時期に知られる。多摩丘陵部に位置する古墳群であり、全長30～40メートル級の前方後方墳1基と前方後円墳2基<sup>(4)</sup>からなる谷本川流域の稲荷前古墳群、20～30メートル級の前方後円墳3基からなる大岡川流域の殿ヶ谷古墳群、一辺18メートルの方墳と全長54メートルの前方後方墳よりなる柏尾川流域の東野台古墳群などが知られる。

更にこのほか弱小な円墳もこの時期には知られる。早淵川上流域の径16メートルの観福寺裏古墳<sup>(5)</sup>、径35メートルの虚空蔵山古墳<sup>(6)</sup>、川崎市久地の径17メートルの伊屋之免古墳<sup>(7)</sup>などであり、多摩

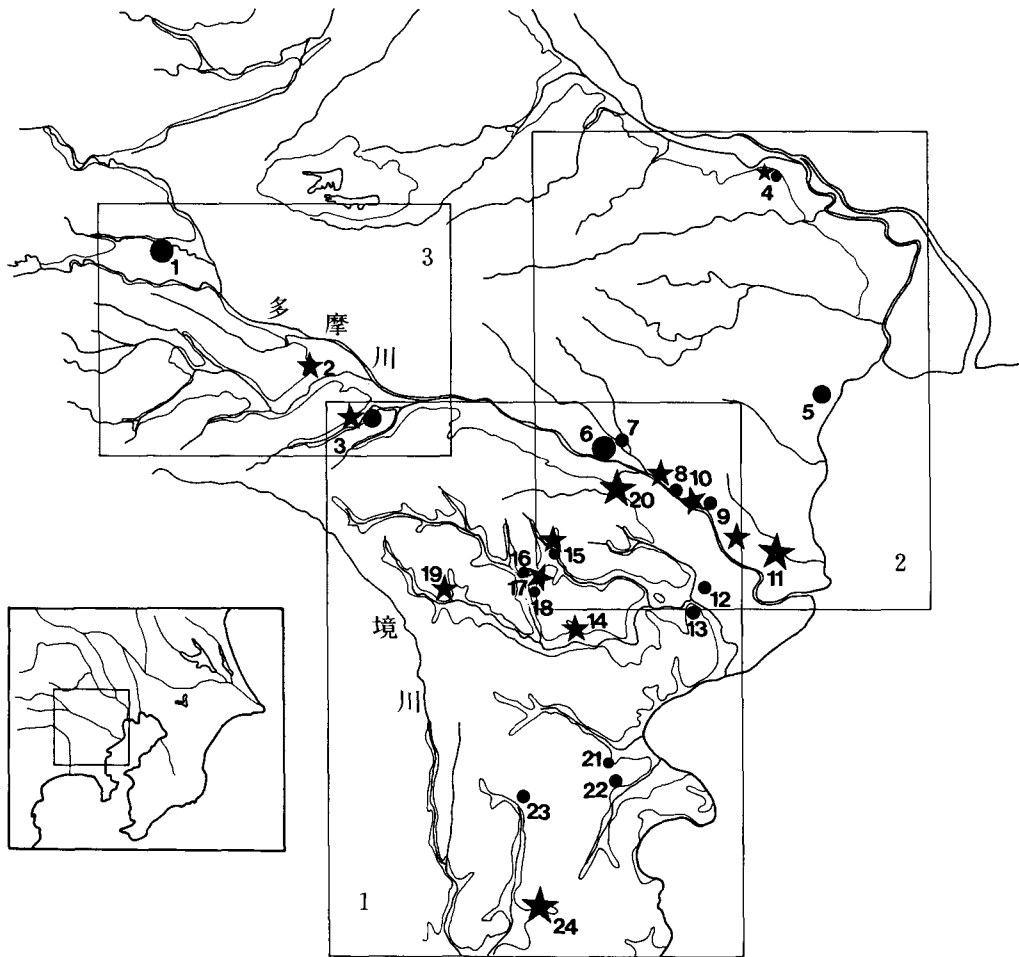


図1 南武蔵主要古墳群

- |             |            |               |             |
|-------------|------------|---------------|-------------|
| 1～瀬戸岡古墳群    | 7～砦中学校古墳群  | 13～駒岡古墳群      | 19～熊ヶ谷横穴墓群  |
| 2～日野横穴墓群    | 8～野毛古墳群    | 14～鶴見川流域横穴墓群  | 20～津田山横穴墓群  |
| 3～大栗川下流域古墳群 | 9～多摩川台古墳群  | 15～赤田古墳群      | 21～瀬戸ヶ谷古墳   |
| 4～赤羽台古墳群    | 10～世田谷横穴墓群 | 16～稲荷前古墳群     | 22～殿ヶ谷古墳群   |
| 5～芝丸山古墳群    | 11～大田横穴墓群  | 17～市が尾・大場横穴墓群 | 23～東野台古墳群   |
| 6～狛江古墳群     | 12～駒岡古墳群   | 18～朝光寺原古墳群    | 24～独川流域横穴墓群 |

(8)  
川上流域の日野市七ツ塚古墳群では銅鏝および石製鏝の出土が知られている。

即ち、この南武蔵地域における古墳文化は、多摩川下流域の古墳群を頂点とする秩序のもとに形成されたものであり、個々の古墳の墳形・規模および副葬品の差異は、地区に君臨した豪族の地域社会に占めたる位置を物語るものといえよう。

次いで中期になると古墳の様相も大きく変化する。前方後円墳の激減およびこれに代わっての地区の首長墓としての円墳の採用であり、埴輪の樹立である。前方後円墳から円墳への首長墓の変遷は多摩川の両岸で明瞭に窺うことができ、特に北岸では立地をも変えるという点で顕著である。

北岸の荏原古墳群では、2基の前方後円墳から約2キロメートル上流の野毛古墳群に主体が移

り連続して6世紀代に至る地区の首長墓の築造を確認できる。5世紀前半の所産年代が想定される古墳が野毛大塚古墳<sup>(9)</sup>であり、南側に造り出しを有する径67メートルの南武蔵最大の円墳にして墳丘には埴輪と葺石が認められる。主体部の箱式石棺からは武器・武具・装身具とともに多量の滑石製の模造品が発見されており、この古墳を特徴づけるものとなっている。

5世紀後半の年代が想定される古墳は御嶽山古墳<sup>(10)</sup>であり、径40メートルの円墳である。墳丘には埴輪が認められ、副葬品としては鏡の縁の周囲に7個の鈴を付けた鈴鏡と2領の短甲が顕著である。短甲は三角板と横柄板の鋳留式のものであり、前代の大塚古墳出土の短甲が革綴式のものであるのと好対照をなす。この古墳に続いて滑石製模造品あるいは埴輪を伴う径30～40メートルの3基の八幡塚・天慶塚・狐塚古墳が6世紀前半までに築造されている。

この様相に対し多摩川南岸の日吉・加瀬古墳群では、前代の前方後円墳の周辺に円墳が築造されており、径20～30メートルの矢上・了源寺・カネ塚古墳<sup>(11)</sup>などが主要な古墳である。矢上古墳からは径20.6センチの龍鏡2面、了源寺古墳からは径12センチの獣帯鏡と径10.5センチの盤龍鏡、カネ塚古墳<sup>(12)</sup>からは径14センチほどの変形神獣鏡が出土しており、小規模であるが副葬品においては地区の優位性を明示している。

一方多摩丘陵部にあつて継続した古墳の展開が確認できる谷本川流域の古墳群では、稲荷前古墳群から1.5キロメートル下流の朝光寺原古墳群<sup>(13)</sup>に転遷して円墳となる。20～30メートル級の3基からなる古墳群であり、三角板鋳留短甲と眉庇付冑と多くの武器を出土した第1号墳、武器および馬具を伴った第2・3号墳が5世紀の後半から6世紀の前半にかけて築造されている。

即ち、南武蔵地域の古墳は中期に至って総じて小形・弱小化する傾向を示すものであるが、唯一武蔵野台地の東端に位置する新興の芝丸山古墳群<sup>(14)</sup>にあつては全長106メートルの規模を誇る前方後円墳が築造されている。この古墳は研究史上、明治期の考古学の泰斗坪井正五郎とともに著名なものであるが、明治30年代の調査によって既に江戸時代に主体部は攪乱され、副葬品はほとんど遺存しないことが判明しており、所産年代は必ずしも明確ではない。しかし、確認される埴輪から5世紀の前半代の年代が想定されている。この古墳に先行する多摩川流域の大規模な前方後円墳には埴輪の樹立は確認されては<sup>(15)</sup>おらず、この点を強調すれば、5世紀前半代における南武蔵地域の最有力の古墳として位置づけることもできよう。しかし、これが勢力を直接に継承する古墳は築造されていない。

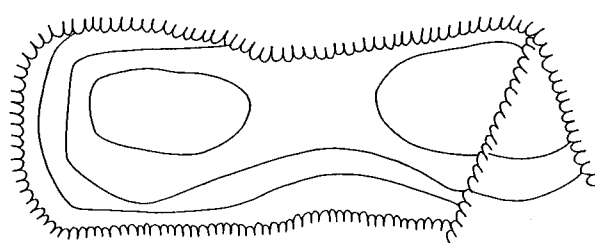
一方、多摩川の中流域では5世紀の後半から6世紀の前半にかけて狛江亀塚古墳を盟主とする狛江古墳群<sup>(16)</sup>が形成される。亀塚古墳は、全長48メートル、後円部径36メートルの帆立貝式の前方後円墳であり、昭和20年代の調査により3基の埋葬施設が確認され、径20.6センチの神人歌舞画像鏡をはじめ金銅装の剣菱形杏葉を含む馬具などが検出されており、6世紀初頭の年代が想定されるものである。この古墳群に現存する古墳は10基ほどであるが、かつては100基に近い数の古墳が存在したものと考えられており、墳丘規模も20～40メートルと比較的大きい点を特徴とする古墳群である。即ち、後期とくに関東地方にあつては6世紀の後半から7世紀の前半にかけて顕

在化する群集墳の先駆をなす存在として、盟主墳の亀塚古墳の副葬品の豪華な点とあわせて注目される古墳群である。

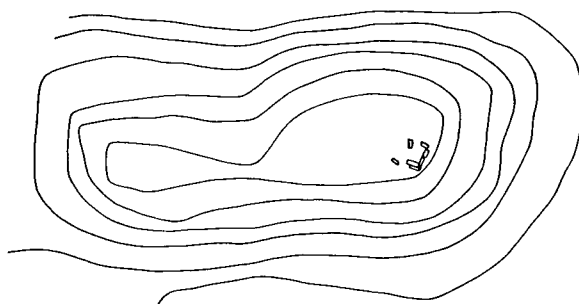
6世紀代には再び前方後円墳の築造が顕著となる。しかし墳丘規模は縮小の傾向にあり、数的な増大は稀少性の減退にして個々の前方後円墳の創出基盤の狭隘さを意味するものであろう。

荏原古墳群では、人物・動物などの埴輪を伴う浅間神社古墳が6世紀代の前半の全長60メートルほどの規模と考えられ、横穴式石室を主体部とし人物・大刀などの埴輪を伴う観音塚古墳が6世紀代後半の全長41メートルの前方後円墳と確認されている。更に荏原古墳群ではこの両前方後円墳のほかに、東の亀甲山古墳と西の宝来山古墳の間に列をなす径15メートルほどの円墳9基よりなる多摩川台古墳群<sup>(20)</sup>のうち、第1号と第2号墳、第3号墳と第4号墳を一体の墳丘と見なしての前方後円墳の可能性が指摘されている。

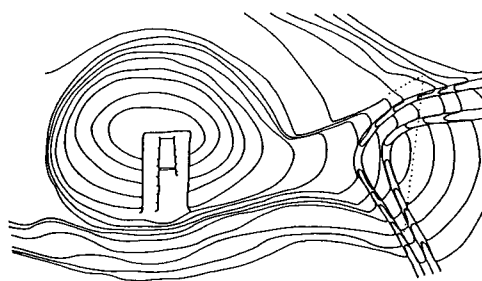
第1号墳と第2号墳をあわせての前方後円墳の可能性は、昭和33年の発掘調査時点より指摘されており、くびれ部が明瞭でなく間延びし後円部の背後に墳丘主軸方向と異なって南に開口する横穴式石室を有する点は観音塚古墳と同様相であり、更に墳丘規模も37メー



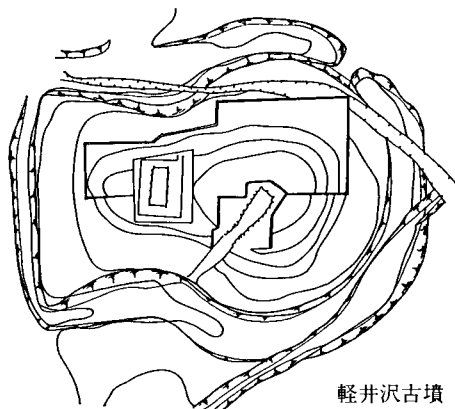
観音塚古墳



多摩川台第1・2号墳



三保杉沢古墳



軽井沢古墳



図2 前方後円墳集成図



図3 多摩川台第1号墳石室

トルと近似するものにしてその可能性は高いものといえよう。<sup>(21)</sup>これを前方後円墳と考えた場合には観音塚古墳との先後関係が問題となるが、円筒埴輪を僅かに伴い横穴式石室の規模が小形化し、群内で7世紀代に展開した石室規模に近い点を考慮すれば、観音塚古墳に後続するものとして、6世紀の末頃ないしは7世紀初頭の年代が考えられよう。第3・4号墳をあわせての前方後円墳の想定は、主体部としての横穴式石

室の位置および墳丘の連接状況より無理があろう。

また、この荏原古墳群においては多摩川台古墳群以外にも連接する円墳をして前方後円墳とも考えられる古墳が他に指摘されている。西岡第31・32号墳<sup>(22)</sup>であり、第31号墳からは石釧の出土が知られ、第32号墳出土の埴輪は4世紀代に遡及するものと考えられている。また、西岡第19号墳も全長60メートルの前方後円墳と想定されるものであり、これらがある時期の首長墓としての位置を占めるものであるならば、荏原古墳群においては4世紀の古墳の初源以来規模を縮小しながらも連綿として6世紀の末頃ないしは7世紀の初頭まで前方後円墳が築造され続けたものとも考えられるが、確実性に乏しい。内容の明確なところでは5世紀代に前方後円墳の系譜が途絶え、6世紀の前半に再現する。

この再現期には南武蔵の他の地区においても前方後円墳が築造されている。鶴見川下流域の諏訪坂・堂の前古墳、帷子流域の瀬戸ヶ谷古墳<sup>(23)</sup>、大岡川流域の大塚古墳などが知られるが<sup>(24)</sup>、埴輪以外にも内容の不明な点が多く、規模は瀬戸ヶ谷古墳が41メートルと知られるのみである。

次いで6世紀の後半代に横穴式石室を主体部とする前方後円墳の発現を見るが、この時期は前方後円墳を利用した地域支配の貫徹を図った最後の時期と認識されるものである。この時期は荏原古墳群では観音塚古墳の築造された時期であり、多摩丘陵において恩田川流域の全長28メートルの三保杉沢古墳<sup>(25)</sup>、帷子川流域の全長30メートルの軽井沢古墳<sup>(26)</sup>が知られる。

即ち、以上の南武蔵地域内における発生期以来の前方後円墳の様相よりすれば、通じて4回の前方後円墳に顕現される地域支配体制の整備状況を窺知することができる。第1回は4世紀の後半代における前方後円墳の発現期であり、各地区で前方後円墳が築造されるものの、古墳個々は墳丘規模・副葬品において顕著な差異を表すものであり、地域支配秩序を形成した支配者層に占めた被葬者の社会的位置を明示するものである。

第2回は確実ではないが、5世紀前半における大半の地区の古墳群における首長墓の前方後円墳から円墳への転化と、新興の勢力による前方後円墳の独占であり、古墳時代における第1回の変革期といえるものである。これはまた地区内において古墳の立地を異にする傾向も指摘されるところであり、地域内に醸成された矛盾を衝いた一つの地域支配の具現といえよう。

第3回は5世紀後半から6世紀前半にかけての時期であり、著名な埼玉稲荷山古墳の築造された時期である。既に指摘のあるように地域支配の大々的な改変が行われたものと考えられ、前代と同じく在地勢力の削減と対抗勢力の扶植という基本に沿った整備であり、鏡あるいは華麗な馬具の伴出として確認されるところである。この時期にはまた粕江古墳群に明示される前代と異なった古墳築造の論理が実践されたところであり、古墳群創出基盤集団の構成員のかなりの部分が古墳に埋葬されるという群集墳の先駆的な様相が示される。

第4回は6世紀後半代における前方後円墳体制の最後の整備期であり、内部主体を横穴式石室とする。この時期はまた横穴式石室のみならず以後南武蔵の横穴系の埋葬施設として地域を席卷した横穴墓の発現期でもあり、さらに横穴墓を主体とする群集墳の形成期でもある。地域内における古墳は横穴墓をもって普遍化したものといえる時、これが定着が前方後円墳の消滅に関連する事象として留意されるところである。

以上の形勢は、基本的には在地勢力の削減と対抗勢力の扶植、あるいは狭隘な地区への新興勢力の進出というものであり、地域内部における要因に基づくもののみとは思われず、時々の畿内中央勢力の施策を濃厚に反映した動向と位置づけることができよう。即ち、古墳は単なる墳墓以上の政治的産物たる所以である。

## 2. 横穴式石室の様相

南武蔵地域においては6世紀代の後半以降、埋葬施設は堅穴系から横穴系に転換する。数からすればこれを契機とする古墳の普遍化であり、横穴式石室と横穴墓がほぼ同時期に発現している。しかし両者の様相は大いに異なる。それは群集の相において顕著であり、南武蔵地域においては横穴墓が主体を成して群集墳が形成され、横穴式石室を内蔵する高塚古墳は地区を限って少数が群集するに過ぎない。

6世紀の後半代に遡及する横穴式石室は極めて少なく、7世紀の前半から中葉にかけてが盛行期となる。更に、横穴式石室の構造は6世紀の導入期から多様な様相を窺知でき、その終末まで継続される。最終期の前方後円墳に採用された横穴式石室は、いずれも軟質の切石を用いたものであり、荏原古墳群の観音塚古墳は玄室幅1.8メートル、玄室長3.5メートルの両袖式、多摩丘陵部の三保杉沢古墳は玄室幅1.2メートル、玄室長2.2メートルの無袖式、帷子川流域の軽井沢古墳は概要報告のみであり詳細不明であるが玄室幅1.2メートル、玄室長3.1メートルで両側壁に緩かな胴張りが窺えるものである。

この他に円墳にも切石使用の横穴式石室が構築されており、その著例が胴張り石室である多摩川下流域の加瀬古墳群の第六天古墳<sup>(28)</sup>、上流域の北大谷古墳<sup>(29)</sup>が知られる。また、室ノ木古墳も詳細な内容は不明であるが、同じく切石を用いた矩形平面の横穴式石室と考えられるものである。

更に多摩川上流域においては、以上の切石を構築材として用いた石室とは異なり、河原石を使

用した横穴式石室がこの導入期から認められ、その終末まで地区の特色をなしている。一は日野市の平山第2号墳<sup>(31)</sup>に確認できる小形の玄室床面が羨道床面より一段下がり、羨道には天井を架構しない堅穴系横口式石室の系譜の想定される石室であり、他は日野市の万蔵院第2号墳<sup>(32)</sup>に示される片袖式のもの、多摩市の塚原第5号墳<sup>(33)</sup>に窺われる無袖式の石室である。このうち無袖式の横穴式石室は、信濃・毛野地域を中心として一部北武蔵をも含んだ範囲で6世紀の前半代以降に展開した東国初現期の特徴的な横穴式石室<sup>(34)</sup>であり、これが波及として考えることができるものである。

堅穴系横口式石室は5世紀代に北九州地方で盛行した石室構造であり、6世紀の後半以降に関東地方に現出した横穴式石室である。関東地方では下野地方において集中分布しており、地区の首長墓としてではなく被葬者集団の有力構成員の埋葬様式として下野中央部に展開するものである。南武蔵における稀例も、被葬者として同様の階層を想定することができよう。

以上に窺知される南武蔵地域の横穴式石室の導入期の様相は、定型化した石室構造の受容として行われたものではなく、個別古墳毎に異なった構造を具現している。これは即ち地域を主導する機構の欠如を意味し、石室工人集団を通じての個別古墳築造勢力毎の地域外勢力との接触を窺うことができるものである。

7世紀代における横穴式石室は、継続して構築されることによって地区毎の特徴が明瞭となっている。石材として切石を用いた両袖式の横穴式石室は観音塚古墳の系譜を受け多摩川下流域の北岸、多摩川台古墳群と芝丸山古墳群を中心として展開するものであり、中に片袖式の石室をも含むものの、地域にあっては強烈な個性を明示するものである。最後の前方後円墳としての多摩川台第1・2号墳の石室構造は遺存状況が劣悪であったがために明瞭ではないが、この地区に拘泥された両袖式として大過ないものと思える。

特徴的な胴張り構造の石室は、導入期以降7世紀の中葉にかけて、多摩川の上流域と下流域の南岸地区を中心として構築されている。上流域では多摩市の塚原古墳群における稲荷塚・臼井塚2基の古墳<sup>(37)</sup>および日野市の七ツ塚古墳群<sup>(38)</sup>中の例、下流域では加瀬の第3号墳<sup>(39)</sup>、多摩丘陵部では谷本川流域の稲荷前第13号墳<sup>(40)</sup>などであり、複室構造とともに単室構造の石室も構築されている。この切石を構築材として用いた胴張り構造の横穴式石室は、その系譜として東海地方西部に6世紀中葉に展開した石室構造を石材を換えて具現したものと考えられるところであり、一部東北地方南部に展開するとはいえ東国においては武蔵地域に特徴的な存在である。6世紀の後半の導入期に武蔵地域の南北に地区を限って構築されたものであり、その在り方は一定の規範のものと現出を想定させる。

7世紀に至っては、北武蔵において多用された石室構造であり、単室構造の横穴式石室の普遍化とあいまって盛行するものである。5世紀代後半以来の武蔵地域の最有力の勢力であった埼玉古墳群の後をうけ、至近の地点に7世紀の前半代以降に展開した若小玉古墳群<sup>(41)</sup>中の径77メートルの円墳の八幡山古墳、一辺28メートルの方墳の地蔵山古墳の埋葬主体部としてかかる横穴式石室が採用されている点を鑑みれば、少なくとも北武蔵地域に特徴的な支配者層の石室構造として位



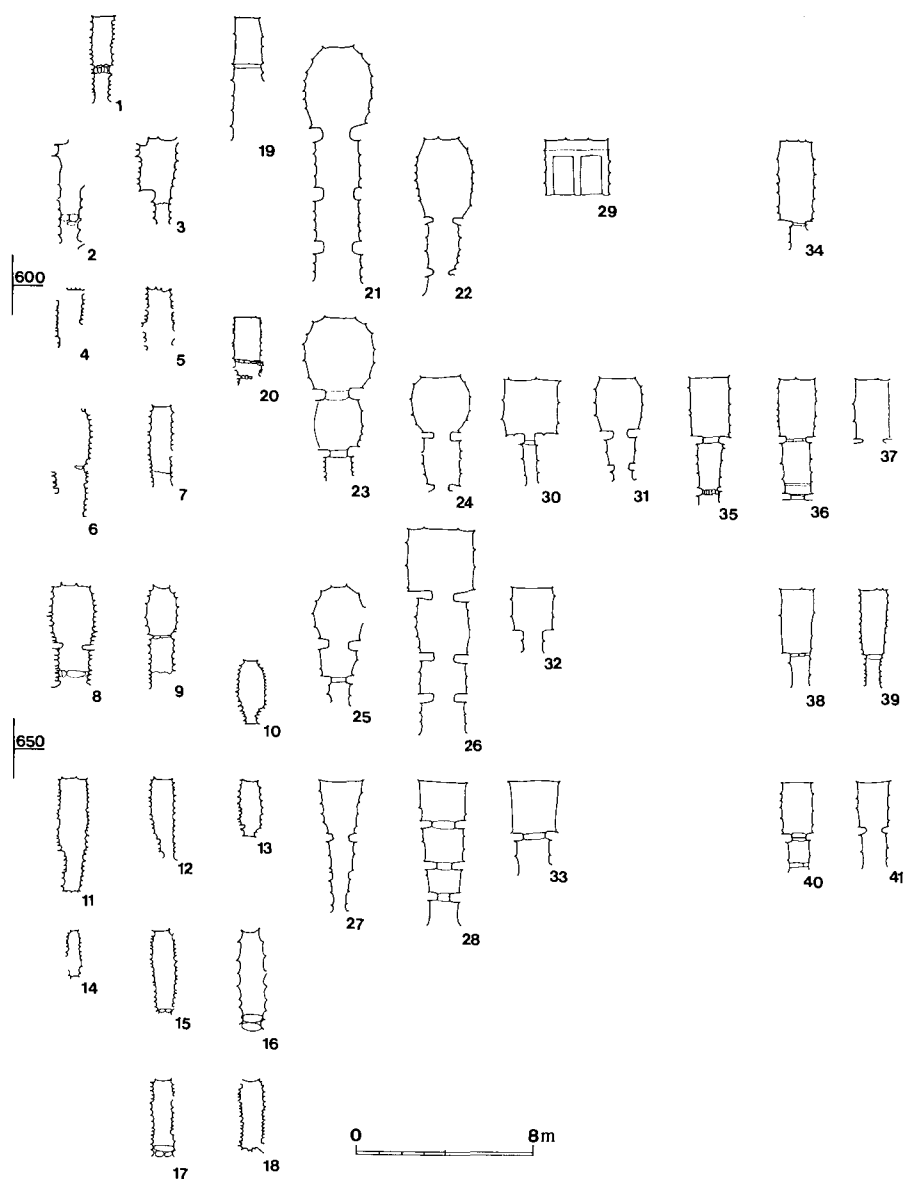


図4 南武蔵主要横穴式石室編年図

- |            |             |             |             |
|------------|-------------|-------------|-------------|
| 1～平山第2号墳   | 2～塚原第5号墳    | 3～万蔵院第2号墳   | 4～鶴山古墳      |
| 5～川口古墳     | 6～小宮古墳      | 7～万蔵院第3号墳   | 8～下谷保第1号墳   |
| 9～万蔵院第1号墳  | 10～瀬戸岡第2号墳  | 11～鹿島古墳     | 12～船田古墳     |
| 13～瀬戸岡第5号墳 | 14～経塚下古墳    | 15～浄土古墳     | 16～瀬戸岡第1号墳  |
| 17～瀬戸岡第4号墳 | 18～瀬戸岡第3号墳  | 19～三保杉沢古墳   | 20～殿谷古墳     |
| 21～北大谷古墳   | 22～第六天古墳    | 23～稲荷塚古墳    | 24～加瀬第3号墳   |
| 25～臼井塚古墳   | 26～馬網古墳     | 27～法界塚古墳    | 28～大蔵第1号墳   |
| 29～室ノ木古墳   | 30～殿山第1号墳   | 31～赤羽台第5号墳  | 32～志村第1号墳   |
| 33～殿山第2号墳  | 34～観音塚古墳    | 35～喜多見稲荷塚古墳 | 36～下沼部古墳    |
| 37～丸山第4号墳  | 38～多摩川台第4号墳 | 39～多摩川台第5号墳 | 40～多摩川台第9号墳 |
| 41～西岡第34号墳 |             |             |             |

置づけることが可能なものと考えられる。

即ち、南武蔵における胴張り構造の石室は、北武蔵勢力との関連の中での出現を考えることができるものであり、この種の構造の石室を内部主体として採用した古墳の所在地は、後期に覇権を確立した北武蔵勢力の南武蔵地域における拠点として位置づけることができよう。

多摩川下流域および多摩丘陵部に所在するこの胴張り石室が、単独で所在し関連する同時期の高塚古墳が存在しないのに対し、上流域の様相は大いに異なる。横穴式石室の企画による検討により、下流域の第六天古墳との関連より6世紀後半代に遡及する可能性の高い北大谷古墳は下流域と同様相として理解されるが、これに後続して7世紀代に大栗川流域の塚原古墳群に展開した2基の古墳は、河原石を用いた横穴式石室と共存しており注目される。即ち、この古墳群においては対岸の万蔵院古墳群と共に6世紀の後半代に河原石を用いた横穴式石室が構築されており、古墳群形成の途中においての複室胴張り石室の採用である。石室構造の差異は墳丘規模にも明瞭であり、この種の横穴式石室がこの地区の首長墓として築造された点が窺知されるところである。更にこれが構造の横穴式石室の現出は、結果として長方形平面を基本とした河原石使用の小形の横穴式石室の様相をも変革せしめており、この点においても首長墓としての胴張り石室の位置づけは明瞭であろう。

胴張り石室は松本浩一<sup>(42)</sup>の指摘いらい、胴張り現出に就いての種々の企画の存在する点が明瞭となってきた。この企画面では、初現期の6世紀後半代では玄室長を基準とした側壁の胴張りであるのに対し、塚原古墳群の2基ではより張り出しの顕著な様相を呈示しており、側壁の曲線を成す円弧の基準単位長としては玄室長よりも短い単位として玄室幅が考えられるところである。河原石使用の小形の石室における胴張り様相の現出の過程は、万蔵院古墳群に明瞭に窺える。第3号墳では片側壁に石室長×2を基準長とする緩慢な様相を確認できるのみであるが、第1号古墳では石室長を基準とする明確な胴張りが玄室の両側壁に窺え、地区に定着した石室工人集団の保持した技術の変革していく様相を窺知することができる。

7世紀前半代におけるこの変革は、その後のこの地区の石室企画を決定づけたものであり、八王子・小宮古墳<sup>(43)</sup>、多摩川の対岸の国立市・谷保の古墳<sup>(44)</sup>などが同様相を呈するものである。更にまた、万蔵院古墳群においては、胴張り様相の顕在化と共に横穴式石室の土壇内への構築への過程も明瞭に窺えるところであり、結果として横穴式石室の羨道は外部へは通せず形骸化したものとなっている。7世紀の中葉以降の石室はすべてこの様相を保持するものであり、ついには瀬戸岡古墳群<sup>(45)</sup>に明示されるように、土壇内に構築された石室は羨道部の付設された玄室の側壁に胴張りの様相の認められる段階から、羨道部が消失し、次いで側壁の胴張り様相を消失して箱式石棺状を呈する変遷をたどっている。

南武蔵地域の横穴式石室においては以上の主体をなす横穴式石室以外に、若干の特徴ある石室構造を確認することができる。共に切石を構築材として用いる矩形平面の石室と、矩形を基本とする複室構造の石室であり、多摩川中流域の南・北岸に5基と武蔵野台地北東端部の志村・赤羽<sup>(46)</sup>

<sup>(47)</sup> 台古墳群で2基の所在が確認されている。矩形の単室構造の横穴式石室は、6世紀の後半代に室ノ木古墳をして確認できるものであるが、7世紀の前半から中葉にかけて展開する。この類例は<sup>(48)</sup> 大宮台地の西台第7号墳が確認でき、北に離れて所在する2基との関連が想定される。

この矩形を連ねた複室構造の横穴式石室は川崎市の馬絹古墳<sup>(49)</sup>が著例であり、3室構造の石室である。墳丘は径33メートルの規模であり、特異な横穴式石室とあわせて地区の首長墓たる点を明示している。この石室の平面企画は30センチを基準長とする奥室10×9、中室7×8と想定されるところであり、中室の両側壁には奥壁長+中室長、即ち30センチ×17を基準長とする胴張り様相を窺知ことができる。また、この横穴式石室に窺われる矩形平面の奥室と、この前部に幅を狭めた長大な通路を柱石により複数に分割するという様相は、上野・総社古墳群中の宝塔山古墳<sup>(50)</sup>の横穴式石室に窺うことができるものであり、両者の関係が問題となる。

宝塔山古墳は一辺54メートルの上野地域最大の方墳にしてこの地域の首長墓の系列をなすものであり、石室平面の企画は30センチの10×11と想定でき長大な羨道を2区に分かつ。これが石室構造の類例は磚槨式古墳としての畿内の大和・黄金山古墳<sup>(51)</sup>が指摘されており、東国において7世紀の第2四半期頃から顕在化する畿内終末期古墳の石室構築技術<sup>(52)</sup>の流入の一例と認識できるものである。この時期に東国各地に認められる終末期石室の影響は地区により異なるものの、基本的には各地の首長墓の石室構造に反映しており、石室構造の様相を通じて地域を異にする首長間の交流をも窺うことができるものであり、馬絹古墳と宝塔山古墳の関連はその一例である<sup>(53)</sup>。

この馬絹古墳の石室構造は、7世紀の中葉に基準長を25センチに代えた企画として受け継がれる。一例は至近の地点に所在する梶が谷法界塚古墳<sup>(54)</sup>であり、奥室の奥壁幅を最大幅とし入り口幅を最小とする台形平面を呈する横穴式石室であり、馬絹古墳の次期の地区の首長墓として位置づけることができるものである。他は対岸の大蔵第1号古墳であり、馬絹古墳からの系譜を強調すれば、7世紀の中葉における北岸の最も有力な古墳として考えることができるものである。

即ち、馬絹古墳は南武蔵の地にあって、関東地方最有力の上野地域の首長墓の石室構造との関連が窺知されるものであり、7世紀中葉における地域内の最有力な存在であり、前代に北武蔵との関連の窺われる地域勢力に代わって台頭した集団の首長を被葬者と想定することができよう。これが勢力は次期の法界塚古墳を経て、その立地より7世紀末頃の年代が想定される山田寺系の瓦を伴う<sup>(55)</sup> 影向寺の創建に関連するものと思われる。古墳を築造した地域勢力と寺院建立との関連の想定される例は南武蔵にあっては唯一例であり、古墳に窺われる地域内における勢力抗争の終焉である。

### 3. 横穴墓の様相

次いで横穴墓であるが、この丘陵あるいは台地の崖面を掘削して埋葬用の空間を造作する特異な葬法は、南武蔵のみならず関東および東北南部の地にあっては6世紀後半代に発現するもので

あり、以降7世紀の前半から中葉にかけて地区を限って濃密に分布するものである。昭和30年代以降、家形をもってする初現時の横穴墓の基本形が時間的な経過に従って簡便化する過程が編年的に思考され長らく主導的な見解としての位置を占めてきたが、これは初現時の横穴墓形態および出土遺物との対応に問題を残すものであり、ようやく見直されつつある現状である。<sup>(56)</sup>

武蔵地域にあっては、南武蔵地区が在原地と多摩丘陵部を中心としてほぼ全域に横穴墓が濃密に分布し群集墳の主要部を担うのに対し、北武蔵地区にあっては横穴墓研究史上坪井正五郎と共に著名な吉見百穴横穴墓群が二百基以上と他を圧倒してこの周辺をあわせて集中分布をなしており、群集墳の主体は横穴式石室を内蔵する高塚が占めている。地域における地区別の群集墳の対照的な二様相であり、房総にあっては南の横穴墓に対する北の高塚、常陸にあっては南の高塚に対する北の横穴墓、下野では東の横穴墓に対する西の高塚と、関東地方に特徴的な“二相包括”の群集墳の存在様相の明示である。

関東地方にあっては現在のところ初現期に遡及する家形横穴墓は見だし難く、南武蔵および相模地域の主体をなす初現期の横穴墓の一つの基本的な構造は、三浦半島部の鴨居、川崎市域の金堀、<sup>(59)</sup>横浜市域の東方・七石山横穴墓群などに窺知されるように敷石を施す長方形平面の穹窿状天井を呈するものであり、この系譜にある横穴墓では7世紀に入って奥壁の幅・高さを最大に採り、玄室の前壁の縮小した台形平面の構造が定着している。即ちこの変遷では基本形の簡便化としての横穴墓型式の変遷を確認できるのであり、地域に主体をなすという意味において古く小松真一の指摘に認められる南武蔵の特質を明示する構造である。<sup>(61)</sup>

しかし南武蔵地域にあっては、初現期以来この基本形以外に種々なる構造の横穴墓の存在が認められ、個々の横穴墓の構造的系譜を明示している。

初現期の横穴墓構造の一つと考えられるのは、この基本形を保持する構造の横穴墓のうち、遺体収納施設として玄室内に組みあわせ石棺を安置する例であり、川崎市北部の津田山に一棺を奥壁に並行に置く例、および二棺を主軸に並行に置く例をあわせて3例確認でき、横浜市域では南部柏尾川流域の七石山横穴墓群中に二棺を主軸に並行に置く例を確認できる。津田山横穴墓群においては構造的に7世紀代に下る石棺内蔵例は一例のみであり、他の南武蔵の地において石棺を内蔵する横穴墓は、7世紀代に対岸の大田区・世田谷区域に若干例認められるが、決して主体をなすものではない。いずれも限定された存在として群内で中核をなした横穴墓と考えられるものであり、この点は出土遺物に顕著に窺える。これの系譜は、石棺を内蔵する横穴墓が盛行した遠江地方との関連が想定されるところであり、横穴墓出土遺物の主体をなす須恵器の供給源としての同地方との関連を横穴墓の構造に示すものといえよう。<sup>(63)</sup>

また、この石棺内蔵例と関連する構造の横穴墓として、奥壁に並行して造り付け石棺を付設する例があり、南関東地方にあっては相模地域を中心に南武蔵の地に若干認められる。この構造の横穴墓も出土遺物からすれば初現期の横穴墓構造の一翼を担う可能性が高いものといえるが、奥壁の幅・高さを最大にし明確な玄室と羨道の区別をなさないという点において基本形との年代に

齟齬をきたすものであり、ここにも横穴墓構造変遷の複雑さを示している。この横穴墓構造もまた東海地方の東部との関連を示すものである。関東地方にあって造り付け石棺を付設する横穴墓は房総地域において発展し地域色を明示するものであり、更に東北地方においてもこの系統の横穴墓の存在を認めることができるものである。

更に津田山横穴墓群中には、唯一例ではあるが玄室の奥および左右に棺台を造作する穹窿状天井構造の横穴墓を確認できる。この型式の横穴墓は、北武蔵の著名な吉見百穴を中心とする横穴墓群、あるいは下総地域の西大須賀を中心とする利根川南岸部の横穴墓群に集中して掘削されたものであり、関東地方における初現期の型式の一つである。この構造の横穴墓の系譜は、出雲における両袖有縁棺台を通じて肥後地方に顕著な、内部をコ字状に区画する同地方の肥後型石室を規範として現出した肥後型横穴墓に連なるものであり、この型式の横穴墓に認められる、もとをたざせば肥後型石室の石障に認められるU字形の有縁部の削り込みは、関東地方の他の横穴墓にも認められる。

他は横穴式石室の構造との関連の明瞭に指摘できる例であり、5世紀後半代に遠く九州・豊前の地で発現を見た横穴墓葬法が、伝播した地でたびたびに共存する横穴式石室の影響を受けて地域的特質を顕現する事例の一つとして考えることができるものである。これの確認は、本来横穴墓にあっては不必要と思われる玄門および羨門構造を壁面に突出させて表現する点に窺われるものであり、容易に横穴式石室の構造を横穴墓掘削にあたって規範とした点を確認できるものである。<sup>(65)</sup> 典型例として市ヶ尾第16号横穴墓<sup>(66)</sup>が指摘できるものであり、矩形平面の奥室と小形の前室からなる複室構造の横穴墓である。更にこの横穴墓にあっては玄門の上が垂直に立ち上がって玄室前壁をなしており、横穴墓には一般的ではない様相であり、この点にも横穴式石室からの影響を窺うことができる。

これに類似する構造を呈する横穴墓は、市ヶ尾横穴墓群とは尾根を隔てた谷戸に所在する小黒谷第3号横穴墓<sup>(67)</sup>であり、単室構造ではあるが玄室矩形平面を基本とし前壁の付設など同様相といえるものである。これの系譜の掘削と考えられる横穴墓は、複室構造として市ヶ尾第6・10号、<sup>(68)</sup> 稲荷前D-3、<sup>(69)</sup> 早野、<sup>(70)</sup> 麻生台第3号、<sup>(71)</sup> 鶴川R-1号横穴墓、単室構造としては白坂第5号、西谷戸第3・4号墓<sup>(71)</sup>などが確認できるものであり、多摩丘陵の谷本川流域の横穴墓群にあって限定された存在、横穴墓群の構成よりすればその中核的な横穴墓として分布している。

この構造の横穴墓は、ほぼ6世紀後半代の当地域における横穴墓初現期よりの掘削が確認できるものであり、7世紀の前半代にかけての展開を確認できる。しかし、南武蔵の地にあっては、横穴式石室の初現形態としての矩形連接の複室構造の石室は見だし難く、当地域に認められる横穴墓に影響を与えている矩形平面を基本とする単室構造の横穴式石室と、胴張り複室構造の石室との折衷型式とも考えられるが、これが横穴式石室としての存在を確認することはできない。むしろ九州地方を初源地として、北陸地方に顕著にして各地に少数認められる矩形連接構造の横穴墓の一端として、横穴式石室の影響のもとに現出した横穴墓構造の南武蔵地域における受容と

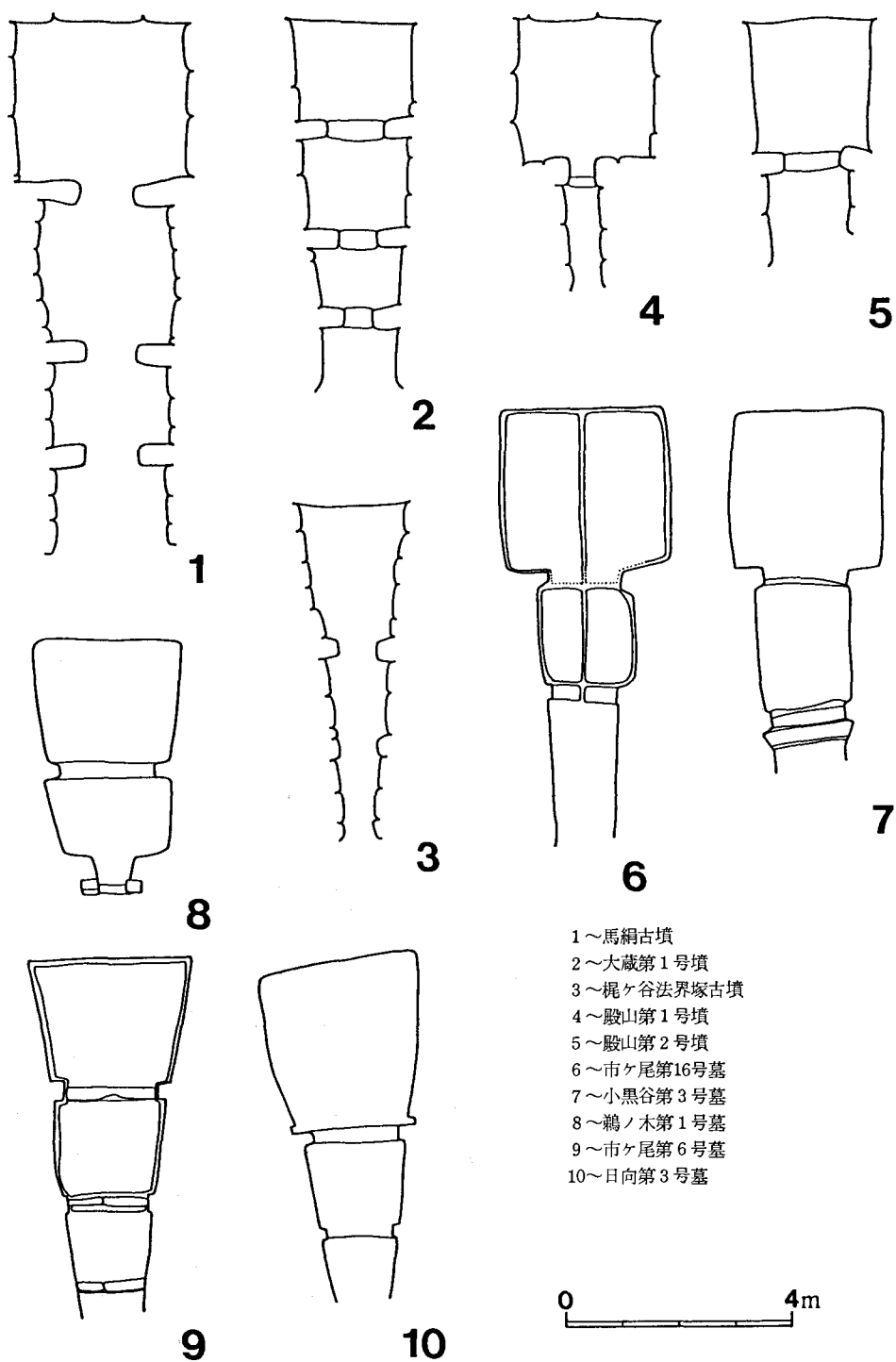


図5 石室・横穴墓集成

<sup>(72)</sup>  
考えておきたい。

次いで、南武蔵において6世紀の末から7世紀の初頭に認められる構造として、有縁棺座を付設する横穴墓の存在がある。これは矩形平面を基調とする玄室の奥あるいは片側壁に沿って棺座を付設するものであり、川崎市の西前田<sup>(73)</sup>、横浜市の下根横穴墓群<sup>(74)</sup>を著例としての発現を窺うことができるものであり、これまた鶴見川中流域、谷本川流域などの横穴墓群において限定された様相を呈する。

更に7世紀の中葉においても新たな構造的特徴の顕著に窺われる横穴墓を確認することができる。奥壁の幅・高さを最大とする地区的特徴を保持する横穴墓に異なる、玄室矩形平面を基調とする一群の横穴墓であり、ここに再び横穴式石室の構造的反映を窺知することができる。これは単室構造を呈するものもあるが、複室構造の例が顕著であり、大きく二つの様相を窺うことができる。

多摩川下流域に窺える例は、7世紀の中葉の所産年代が横穴式石室の企画の検討から考えられる馬絹古墳の石室の系統が想定される、奥壁幅を最大として入り口幅を最小とする複室ないしは三室連接構造の川崎市の法界塚古墳・世田谷区の大蔵第1号古墳<sup>(75)</sup>の横穴式石室との関連の窺われる横穴墓である。右岸で川崎市の日向第3号横穴墓<sup>(76)</sup>、左岸で大田区の鶴ノ木第1号横穴墓<sup>(77)</sup>が確認され、初現期に同じく壁面における玄門の突出として認識できるものである。また、この時期には大田・世田谷区域においては横穴墓の入り口に切石を組み合わせた羨門を付設する例がかなり認められる。これも古くから指摘されているようにこの地区に顕著に認められる切石を用いた横穴式石室との関連が想定されるものであり、この地区における重要な特徴となっている。

一方多摩川上流域に顕著な例は、切石を構築材として使用した胴張り複室構造の横穴式石室を規範とする特徴的な横穴墓であり、多摩川南岸の日野・多摩市域を中心として北岸の国分寺市域に及ぶ分布を確認でき、この系譜の想定される横穴墓は北岸では三鷹市域にも及んでいる。これが出現の過程は、世田谷区の下野毛岸第3号横穴墓<sup>(78)</sup>に顕著に窺うことができる。即ちこの横穴墓は、円形平面・穹窿状天井構造の奥室と、切石を用いた矩形平面の前室及び羨道からなる複室構造の横穴墓であり、横穴式石室と横穴墓の折衷形として転換の過程を如実に表すものである。

これが横穴墓として定型化した様相は日野市の坂西横穴墓群<sup>(79)</sup>に顕著に窺うことができるものであり、あわせて墓前域の石積を特徴としている。これが所産年代は、7世紀の中葉以降後半にかけての短い期間と考えられるところであり、次いで掘削に当たっての基準単位長を異にする、単室構造の横穴式石室との関連が考えられる矩形平面の横穴墓が認められ、この転換の過程で矩形平面で痕跡的に切石で複室を意識した構造の横穴墓が認められる。

更に、この7世紀の中葉に顕在化する構造として、横浜市南部・柏尾川流域に展開した棺室構造の横穴墓<sup>(80)</sup>が確認できる。この種の横穴墓からは所産時期を明示する遺物の出土が僅少であり、必ずしも初現の時期は明確ではない。しかしその特徴的な構造として、基本形における玄室が前室に転化し、この奥壁に小形の埋葬用の空間を造作する様相は、畿内終末期に展開した横口式石

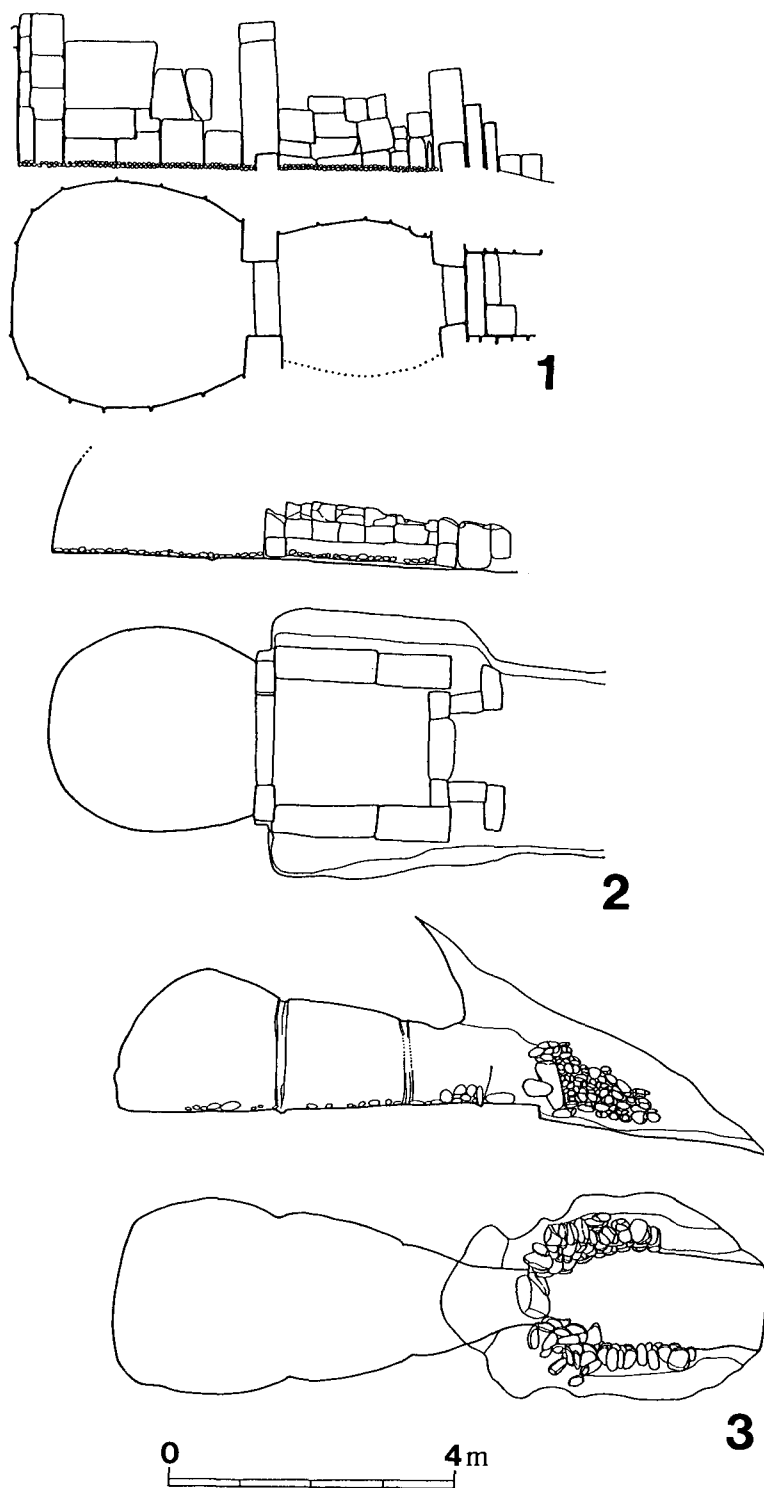


図6 横穴墓変遷図

1～多摩市・稲荷塚古墳 2～世田谷区・下野毛岸第3号墓 3～日野市・坂西第4号墓



槨に酷似するところであり、その出現に至る過程の追及は問題として残るものの、東国における畿内のこの種の石室の影響が7世紀の中葉頃に認められ、これが波及の一端として7世紀後半代の盛行を想定することができるものである。

以上瞥見したように、南武蔵地域における横穴墓は、従前考えられたような単純に横穴墓の基本形が簡便化する変遷を辿るものではなく、初現期以来複雑な様相を呈するものであり、初現期の横穴墓構造の差異は単に横穴墓掘削工人の系譜の違いをのみ表すものではなく、ある程度被葬者集団の相違をも意味するものかと思われる。

展開期の横穴墓構造の変容の最大の要因は、横穴式石室の構造の横穴墓への模写であり、7世紀の中葉以降に顕著である。地域に併存する横穴墓と横穴式石室の専門工人のあり方は、地域によって異なる。これが同一の集団による施工と考えられる例は出雲地方の家形横穴墓と出雲型石室<sup>(81)</sup>に窺知することができるが、南武蔵においては基本的には両者は区別して管掌されたものと思われるが、7世紀の中葉を境に激減する横穴式石室の様相を考慮すると、この時期に専門工人の職掌に重大な変化があった結果としての横穴式石室構造の横穴墓への模写といえることができる。

#### 4. 群集墳の様相

以上に記した横穴式石室と横穴墓という異なる二つの横穴系の葬法をして、後期古墳時代の最大の特徴と位置づけられる群集墳の形成が確認できるものであるが、地域総体としては横穴墓が圧倒しており、よく地域の特徴を明示している。既に記したようにこれらは6世紀代の後半に南武蔵の地に発現するとはいえ、その盛行する時期は7世紀代であり地区毎に様相を違えて造営されている。

横穴墓が地域を席卷するのに対し、横穴式石室を内蔵する古墳は限定された存在であり、群集の相を示すのは多摩川下流域北岸における多摩川台古墳群と芝の丸山古墳群、および多摩川上流域の瀬戸岡古墳群に代表される地区のみである。しかし、両者は互いに異なった葬法として分離して存在するものではなく、有機的な関連の下に造営されたものと考えられるものである。

多摩丘陵部においては、群集する形態を採るのは横穴墓のみであり、基盤の軟らかい岩盤を掘削して鶴見川流域の横浜・町田・川崎市域を中心として多摩川南岸の横浜・川崎市域、および横浜市南部の帷子川・柏尾川流域に分布している。その数は主体をなす鶴見川流域以北で118群498基<sup>(82)</sup>が確認されており、帷子川流域で2群29基、柏尾川流域では支流の独川流域を中心として、180基以上の存在が確認されている。これは発掘調査が行われた横穴墓群を中心に、地区を限定して行われた分布調査により確認される数であり、古墳時代後期に造営された数は優に1,000基を上回るものと想定される。

この地区において最もよく群集する横穴墓の様相が知られるのは、基数・発掘事例ともに主体をなす北部の鶴見川流域とその隣接地であり、横穴式石室を内蔵する古墳との関連も窺知するこ



図7 多摩丘陵部群集墳分布図

- |             |             |             |             |
|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 1～熊ヶ谷横穴墓群   | 2～熊ヶ谷東横穴墓群  | 3～能ヶ谷横穴墓群   | 4～麻生台横穴墓群   |
| 5～上谷本横穴墓群   | 6～大場衛門谷横穴墓群 | 7～市が尾横穴墓群   | 8～赤田横穴墓群    |
| 9～下根横穴墓群    | 10～天ヶ谷横穴墓群  | 11～東方横穴墓群   | 12～長者横穴墓群   |
| 13～下作延横穴墓群  | 14～津田山横穴墓群  | 15～蟹ヶ谷横穴墓群  | 16～夢見ヶ崎横穴墓  |
| 17～八千代田横穴墓群 | 18～浅間下横穴墓群  | 19～長昌寺前横穴墓群 | 20～中居丸山横穴墓群 |
| 21～宮ノ前横穴墓群  | 22～七石山横穴墓群  |             |             |
| A～赤田古墳群     | B～稲荷前古墳群    | C～北門古墳群     | D～三保杉沢古墳    |
| E～殿ヶ谷古墳     | F～馬網古墳      | G～法界塚古墳     | H～第六天古墳     |
| I～加瀬第3号墳    | J～軽井沢古墳     | K～室ノ木古墳     | L～白根古墳      |
| M～影向寺       | N～奈良古墳      | O～上郷深田遺跡    | P～根岸古墳      |

とができる。しかし、この地区内においても横穴墓の分布にはおのずと片寄りが認められ、集中する地点における調査事例が多いという当然の結果を確認できる。鶴見川の本流域では研究史上<sup>(83)</sup>著名な南岸地区よりも北岸における分布が顕著ではあるが、調査事例は必ずしも多くはない。支流の早淵川流域においては、上流域に分布が集中しており調査された横穴墓群も多い。谷本川流域はこの地区の横穴墓分布の主体をなすところであり、著名な市ヶ尾・稲荷前横穴墓群などを中心とする中流域と、鶴川横穴墓群を中心とする上流域に分かれて分布している。恩田川流域における現在知られる横穴墓の分布は全域に散在する状況であり、必ずしも多くはない。しかし、この地区においては積極的な所在確認調査が行われたことはなく、より以上の存在を想定することができる。この他に多摩川に面する川崎市域では北部の津田山地区に集中して70基以上、長者穴横穴墓群<sup>(84)</sup>で33基の所在が確認されており、このほかは数基ずつの分布である。

この地区における最大の特質は、横穴式石室を内蔵する高塚古墳と一体となつての横穴墓群の造営が顕著に確認できる点にある。この様相の最もよく窺えるのは最近調査された早淵川上流域の赤田古墳群<sup>(85)</sup>である。尾根上に所在する径20メートル前後の墳丘規模で、切石を使用した3基の横穴式石室を内蔵する高塚古墳が6世紀の後半代から7世紀の中葉にかけて造営されており、丘陵斜面に42基の横穴墓が集中して掘削されている。これら同地点に同時代に造営された高塚古墳と横穴墓の位置づけは、一般的にはここに墓域を設定した集団の首長墓として累代的に造営された高塚古墳と、同じく数世代にわたる集団の有力構成員の墓としての横穴墓と理解される。関東・東北地方にあっては茨城県・幡山<sup>(86)</sup>、福島県・芥内古墳群<sup>(87)</sup>に匹敵する稀な例として極めて重要な調査例である。ここでは42基の横穴墓が8群に分かれて造営されており、基数・規模に差異を表しており被葬者集団内部における個別小群の位置を反映している。

この地区の他の地点においてはこの赤田古墳群ほど明瞭に横穴式石室内蔵墳と横穴墓の関連を窺えないものの、両者が一体となって調査された例として、谷本川中流域の稲荷前古墳群における径16メートルの第13号墳と斜面に位置する9基の横穴墓が確認できる。この古墳群の内容は不明な点が多いが、写真で示された横穴式石室は両側壁に僅かに胴張り様相が認められる切石を用いた単室構造であり、横穴墓とは併存して造営されたものと考えられる。<sup>(88)</sup>

また、恩田川流域において最大規模の25基よりなる熊ヶ谷横穴墓群<sup>(89)</sup>、および近くにこの熊ヶ谷横穴墓群と密接に関連して位置する熊ヶ谷東横穴墓群<sup>(90)</sup>の位置する谷戸の最奥の尾根部には、切石を用いた横穴式石室を内蔵する可能性の高い高塚古墳の所在が想定されており、6世紀後半代の初現と想定されるこの谷戸の横穴墓群の形成に高塚古墳が関連したものと考えられる。<sup>(91)</sup>

更に、恩田川下流域南岸の前方後円墳の三保杉沢古墳、鶴見川南岸の殿谷古墳、帷子川流域の前方後円墳の軽井沢古墳の近くにも横穴墓群の所在が確認できるものであり、横穴系葬法の展開にあたって両者の密接な関連が想定されるところである。

勿論これらの地点以外の多くの横穴墓群は、至近の距離に横穴式石室を内蔵する高塚古墳が見いだせず、直接的な関連は窺えない。しかし、ここに示された適当な間隙を有しての石室墳の分

布の示す様相は、容易に小地区を統括した首長の墓としての石室墳と、これに従う集団の有力構成員の墓としての横穴墓との理解を可能とする。最近確認ないしは調査された北門古墳群あるいは殿谷古墳の遺存状況よりすれば、現在知られる以上の石室墳の存在も予想されるところであり、より一層の関連を予測せしめる。

即ち、以上の横穴墓と石室墳の様相に前方後円墳と円墳という墳形の違いを勘案すれば、6世紀の後半代に顕在化した地区の開発は、各流域ごとに秩序ある形態で進められたものと考えられ、これが墳墓の様相として、Ⅰ～横穴式石室を内蔵する前方後円墳と横穴墓群、Ⅱ～横穴式石室を内蔵する円墳と横穴墓群、Ⅲ～横穴墓群、という三類型が確認できるものであり、一定地域内の集団内における小地区ごとの格差を反映したものといえることができる。

次いで7世紀代に入るとこの様相も大きく変化し、小地区の首長墓としての石室墳が造営される例は稀となり、多くは横穴墓のみで墓域が構成されるようになる。

この鶴見川流域を中心とする様相に対し、多摩川に面した南岸地区の様相は若干異なる。即ち明確な石室墳と横穴墓よりなる古墳群の確認されない点であり、横穴墓は石室墳の周辺に掘削されている。既に記したように6世紀後半代から7世紀前半にかけてと、7世紀中葉以降はこの地区の首長墓としての横穴式石室を内蔵する古墳は立地を異にしており、内容不分明ながら最北における7基の高塚よりなる生田根岸古墳群<sup>(92)</sup>の存在を併せて強調すれば、津田山70基以上、長者穴33基と北に濃い横穴墓の分布は、石室墳の立地と関連するものといえよう。

また、横浜市南部の柏尾川流域における特異な横穴墓の分布も注意されるところである。この地区においては、前期に遡及する高塚古墳は確認されているものの、横穴墓と同時代に営まれた石室墳は存在しない。横穴墓のみで油川流域に集中分布するものであり、初現は南武蔵の他の地区と同じく6世紀代に遡るとはいえ、その盛行は棺室構造の横穴墓によるものであり、7世紀の中葉以降後半代と考えられるところである。ここで注意されるのが横穴墓群とは至近の距離に存在する、最近調査された7世紀後半代から9世紀にわたって営まれた製鉄関連の上郷深田遺跡<sup>(93)</sup>である。あるいはこの横穴墓群の被葬者集団として、一つの理解として古くより指摘されてきた特殊技術保持者集団を想定することもできよう。

次いで多摩川北岸における群集墳の特徴は、明確な横穴式石室を内蔵する高塚群集墳の存在であり、数的に圧倒する横穴墓と共存する。横穴墓は久ヶ原・塚越・池上などの台地東端部の呑川流域にローム層を掘削して集中しており、多摩川に面する斜面では10基程度の纏まりとして世田谷区域から野川流域の三鷹市域まで分布し、このほか渋谷川・神田川流域にも若干確認され、総数は約300基を数える。分布は更に荒川に面する台地北部にもおよぶものの、北区赤羽台19基・和光市吹上原9基<sup>(96)</sup>と僅少なものである。

横穴式石室を内蔵する群集墳は、同世代に複数の古墳が近接して築造されたものとして、規模は小さいものの大田区<sup>(97)</sup>の多摩川台古墳群と港区の芝丸山古墳群が確認できる。多摩川台古墳群の付近には西岡第34号墳などの石室墳も知られており、更に多くの石室墳が造営されていたものと

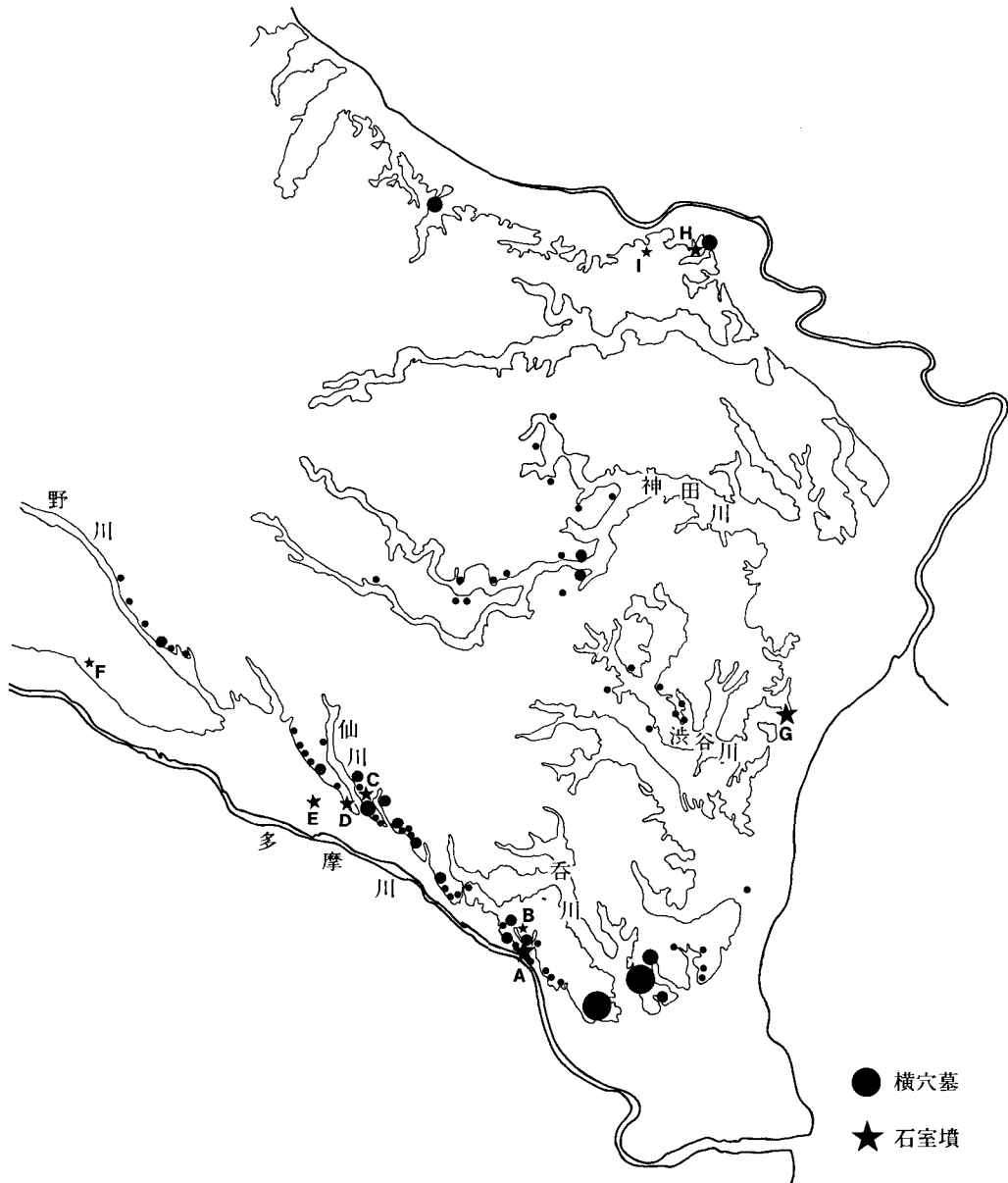


図8 多摩川北岸群集墳分布図

A～多摩川台古墳群 B～観音塚古墳 C～大蔵古墳群 D～殿山古墳群 E～喜多見古墳群  
F～桜塚第2号墳 G～芝丸山古墳群 H～赤羽台古墳群 I～志村古墳群

考えられる。前方後円墳としての第1・2号古墳が認められるのであれば先行する観音塚古墳とあわせ、群集墳形成期に地区の首長墓として2代にわたって前方後円墳が築造され、これを支えた直属の集団の統括者の墳墓としての石室墳という関係が想定されるところであり、多摩丘陵部で鶴見川水系全体で想定された墳墓に示された支配関係が、一所に凝縮した様相を窺うことができる。この横穴式石室を内蔵する古墳の被葬者集団が、数的に圧倒する横穴墓被葬者を支配したものと考えられるところであり、横穴式石室を内蔵する前方後円墳および多摩川台古墳群に示さ

れる地区支配者層の充実が、近隣における横穴墓の数的増大と関連するものかと考えられる。

これに対し、芝丸山古墳群は円墳9基よりなり6世紀後半から7世紀前半代にかけて造営されたものであり、この点では多摩川台古墳群に等しい。その立地よりして渋谷川流域、更には神田川流域に掘削された横穴墓群との関連を想定することができよう。

これに類似する様相を呈するのが多摩川に面する世田谷区域の仙川および野川下流域に造営された大蔵<sup>(98)</sup>・殿山<sup>(99)</sup>・稲荷塚<sup>(100)</sup>などの石室墳であり、7世紀の前半から中葉にかけてのこの地区の首長墓として考えることができるものであり、周辺に90基程の横穴墓が分布している。この石室墳と横穴墓の関連は台地北側の赤羽台古墳群にも窺うことができ、近隣の志村古墳群の石室墳をもあわせ一群をなす。

以上多摩川の北側においても、首長墓としての石室墳と一般構成員の墓としての横穴墓の関連を想定することができるものの、多摩丘陵部と同じく石室墳と横穴墓は必ずしも併存するものではなく、石室墳の若干の先行が確認できる。確かに大田区域においては7世紀の前半代に両者は併存しており、世田谷区域においては7世紀の前半から中葉にかけての併存を確認でき、基本的にはこの関係は許容されるものと思われるが、芝丸山および赤羽台においては石室墳の先行が明瞭であり、直接的な関連は窺知できない。しかし、石室墳にはじまる新たな体制の地区の開発が、形を変えて横穴墓の造営時期に一層展開したものとしての関連を想定しておきたい。

多摩川の上流域の様相は、大きく他の地区と異なる。これはすなわち横穴式石室を内蔵する高塚古墳よりなる群集墳のみが盛行した地区を確認できる点であり、横穴墓はその下流域にのみ展開している。石室墳としての群集墳は、秋川市・瀬戸岡古墳群が著例であり、39基よりなる最大の規模を誇るものである。この古墳群の造営された年代は、石室内より検出された火葬骨蔵器より奈良時代墳墓と考えられたこともあるが、<sup>(101)</sup>この地区に展開した横穴式石室の系譜からは7世紀の中葉から後半代の所産と考えられるものである。<sup>(102)</sup>横穴式石室の特徴としては土壇内に構築された胴張り様相を有する玄室と羨道よりなる石室が、羨道を消失し、次いで胴張り様相を失い箱式石棺状に変遷するものであり、多摩川北岸の昭島市域の経塚下・浄土古墳も同様相を呈する。<sup>(103)</sup><sup>(104)</sup>この地区においては横穴墓の存在は知られていない。

この地区の下流域では群集墳は横穴墓の展開として確認できる。この日野・多摩・八王子・国立市域における石室墳は、6世紀の後半代から築造され始める点は南武蔵の他の地区と同様であるが、群集する例に乏しく多くは単独であり、谷地川との合流点に立地する日野市七ツ塚古墳群と、この地区の中心地である大栗川流域で若干集中するのみである。更に多くは7世紀の前半までの築造であり、中和田横穴墓群で確認できたこの地区の横穴墓の初現の7世紀中葉以降に下る石室墳は八王子盆地周縁の数基に過ぎない。横穴墓は既に記したように特異な横穴式石室よりの系譜の想定される胴張り複室構造のものに始まっており、次いで同じく横穴式石室の影響の考えられる矩形平面のものに変わり、これが簡略化する変遷をたどるものである。このような地区内において発想されたという意味での“南武蔵型の横穴墓”は、以上に記したように各所に認めら

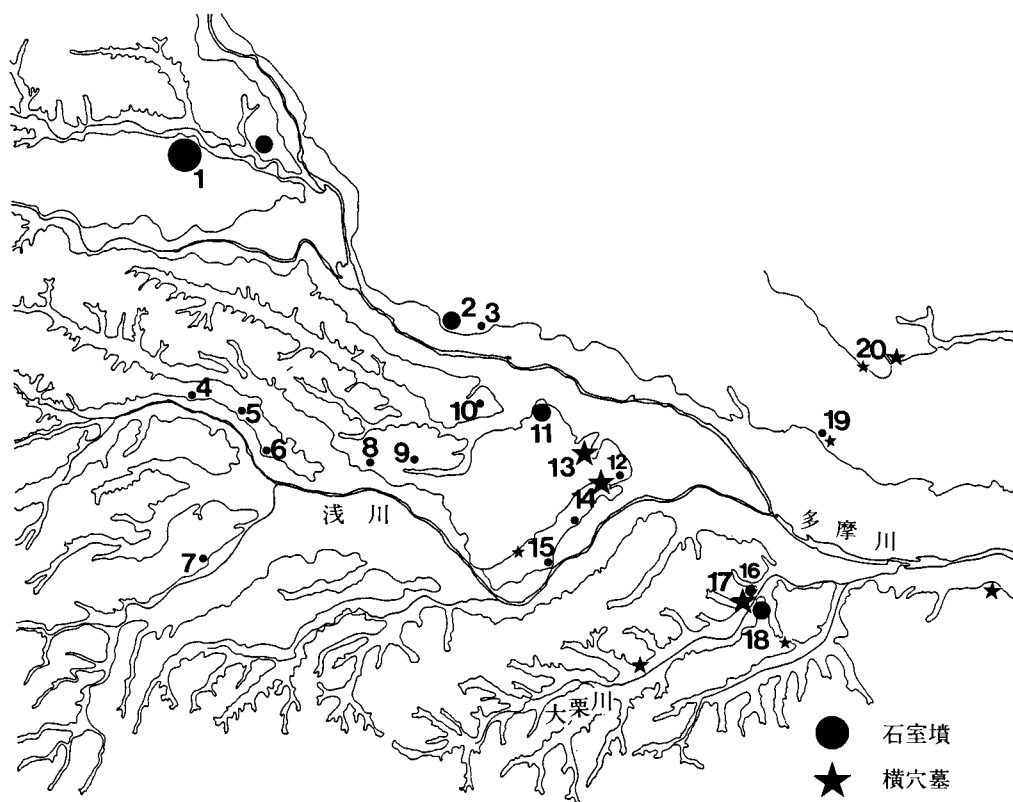


図9 多摩川上流域群集墳分布図

- |           |            |           |             |            |
|-----------|------------|-----------|-------------|------------|
| 1～瀬戸岡古墳群  | 2～浄土古墳     | 3～経塚下古墳   | 4～調井古墳      | 5～川口古墳     |
| 6～鹿島古墳    | 7～船田古墳     | 8～鶴山古墳    | 9～北大谷古墳     | 10～小宮古墳    |
| 11～七ツ塚古墳群 | 12～神明上古墳   | 13～坂西横穴墓群 | 14～梵天山横穴墓群  | 15～平山古墳群   |
| 16～万蔵院古墳群 | 17～中和田横穴墓群 | 18～塚原古墳群  | 19～谷保・東方古墳群 | 20～内藤新田横穴墓 |

れるものの、かかる型式のみで横穴墓群が形成されるのはこの地区のみであり、最大の特徴と考えられるものである。横穴墓群は南岸の日野市坂西・梵天山<sup>(106)</sup>、多摩市・中和田横穴墓群を代表とするものであり、北岸にも若干分布して約50基の所在を確認できる。

以上、多摩川上流域における群集墳の形成は、7世紀の後半代に下の横穴墓に対する上の石室墳と葬法を異にして行われたものであり、基本的な様相を最終的に小地区に凝縮した形で窺知することができるものである。

## 5. 群集墳の類型

群集墳は、限定された墓域の中に小規模な古墳が密集して造営される点を最大の特徴とするものであり、古墳時代においては墳丘の欠如は基本的にその被葬者の立場を限定するとはいえず、同時期に同様相で斜面を掘削して営まれた横穴墓も群集墳の一類型と考えられている。

群集墳の研究は畿内地方の諸例を対象として進められてきたものであり、当初においては群形

成の分析は時期的な数の変遷を主眼として類型の設定などが試みられ、重要な指針を与えてきた。<sup>(107)</sup>  
次いで群構成の視点は、群中に墓道を想定して形成過程を考慮しての支群の抽出と、被葬者集団としての個別家族の想定にまで至るのであるが、これが結果として群集墳はすべて被葬者集団内の個別家族が均等に墓域を分割占有して数代にわたり古墳を造営したとする単純な思考が支配的となってきた。

果たして群集墳は、かく単純な構成により形成されたのであろうか。一つの発想は数例の分析を明解に果たし得ても多くを例外として残す。ここで最近の畿内地方における、従前の群構成の想定に就いての出土遺物を基本とした批判<sup>(108)</sup>、および調査例は注目される場所である。すなわち、出土遺物を重視する観点よりは、従前ほどの明確な群構成の復元を困難とするものであり、柏原市・田辺古墳群<sup>(109)</sup>の調査は群形成の想定に出土遺物を考慮していないという批判も見受けられるものの、少なくとも個別の造営主体の墓域の明確な単位群と、同時に集団的に形成される単位群とが一つの群中に共存するという点が明確になったものとして、極めて重要な資料と認識されるものである。これらを踏まえ、東国の横穴墓群を対象として群構成を見てみると、そこに複雑な様相を認めることができる。

数基よりなる群の場合はこれが最小の構成単位として、Ⅰ～個別の造営主体の累代的な構築によるものと、Ⅱ～被葬者集団内の複数の造営主体の単次すなわち同世代における造営という場合とが考えられる。基本的にはこの二つの基礎単位の集合として大型の群が形成されるものであり、Ⅲ～Ⅰ類の集合として墓域全体の中で個別の造営主体の墓域の明確な例、Ⅳ～Ⅱ類の複次的な集合として個別の造営主体ごとに墓域が分割されるのではなく、墓域の中で同世代の墳墓ごとに纏まり集団的に形成される例が確認される。さらに大型の群にあっては、より複雑な様相としてⅤ～群形成の当初はⅣ類の様相を呈するが後半に至り特定の墳墓に近接して次期の墳墓が造営され、この段階で個別の墓域が明確となる例、Ⅵ～群を統括する存在としてのⅠ類とこれに従うⅣ類より構成される例などが知られる。<sup>(110)</sup>

これらの類型のうち、群構成についての従前の考えはⅢ類のみの確認であり、これ以外の推定が行われたことはない。群集墳の群構成がこのような複雑なものであるという事は、被葬者集団内における墳墓造営の規制が様々であったという事の反映であり、個別地区総体における集団の占めたる位置を物語るものといえよう。基本的には個別の造営主体ごとの限定された墓域の区分は、造墓主体としての被葬者集団に占める個別家族の明確な自立の証左として認識できるものであり、個別造営主体相互の格差を内包しない。

更には、個別の造墓主体における造墓活動は、基本的には一代一墓を原則としたものと考え来っているものの、実際の被葬者人骨の出土状況よりすれば小児骨を伴わない女性のみの埋葬が確認される例もあり、一代に複数の墓の造営が可能であった有力家族の存在なども考えられる。<sup>(111)</sup>しかしこれは人骨の遺存が認められなかった場合の、集団内部で劣勢であったが故の個別の墓域確保が困難であった結果としての、同時期の複数近接例との識別に問題を残す。すなわちこ



れは、上述のⅠ類の場合にあっても、必ずしも一基ずつの造墓を意味するものではないということであり、更に複雑な様相を予測せしめる。

群集墳は単に群集墳としてのみ存在するものではなく、既に見たように地区の首長墓と密接に関連して造営されている。従って群の形成過程も首長墓との関連が考慮されなければならない。かかる視点で南武蔵の横穴墓群を見ると、大型の群にあってはⅥ類の個別の墓域の明確なそれぞれの被葬者集団を統括した有力な一群と、これに従属する多くの集団的に形成された横穴墓よりなる群、Ⅳ類の有力な一群の認められない個別の造墓主体の墓域の不明確な群とを窺知することができる。これを地区の首長墓との関連で見ると、同一の群ないしは至近の距離に形成された場合にはⅣ類として、首長墓と群集墳の立地が懸隔する場合、あるいは高塚古墳としての首長墓が認められない場合にはⅥ類として形成された例が多いものと想定される。これが例としては、Ⅵ類として熊ヶ谷横穴墓群、市が尾横穴墓群、下根横穴墓群、東方横穴墓群などが知られ、Ⅳ類としては長者穴横穴墓群、可能性として赤田横穴墓群などが指摘されよう<sup>(113)</sup>。

この様相は独り南武蔵のみの様相ではない。関東地方における大型の横穴墓群として発掘調査された例を見てみると、茨城県・幡山横穴墓群は3支群で53基よりなるものであり、6世紀後半から7世紀代にかけてほぼ5期にわたる変遷を窺知することができるものであるが、いずれの支群も同時期の横穴墓が近接して複数造営されるⅣ類として認識されるものであり、これが誘因は

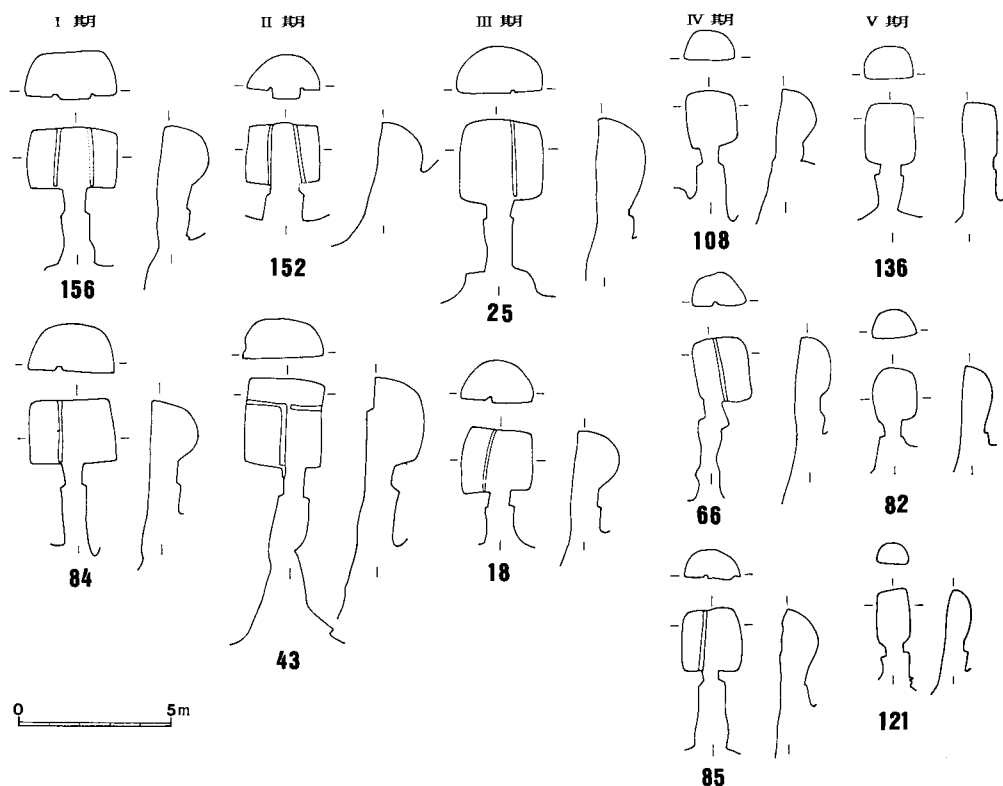


図10 吉見百穴横穴墓群横穴墓編年図

尾根上に造営された横穴式石室を内蔵した高塚古墳群との関連にあるものと想定することができる。また同じく茨城県における例としての日立市・千福寺下横穴墓群<sup>(114)</sup>は一部調査以前に破壊されているとはいえ、40数基の横穴墓が2群に分かれてそれぞれがIV類の様相を示している。

更に、東国の代表的な横穴墓群として研究史上著名な吉見百穴横穴墓群は、確認総数 212 基を数える超大型の横穴墓群であるが、規模の大なるが故に群構成は一層複雑である。発掘調査後百年を経て出土遺物の明瞭でない横穴墓を分析するには企画よりの視点しかない。横穴墓掘削に当たっての基準長の変遷・規模・棺座・簡便度などを考慮すると5期の変遷を想定することができる。これをもとに群の構成を見ると、尾根・谷などの地形に従い9つの支群に分かつことができ、それぞれの支群で異なった構成を示すものである。横穴墓の構造が知られる7つの支群では、基本的に同時期に複数の横穴墓が掘削されておりこの意味においてはIV類であるが、支群ごとに異なるものの4つの支群においては形成の途中で次期の横穴墓が先行する横穴墓に近接して掘削されるようになり、V類として支群中の造営主体の区分が明確になっている。しかし、継続して掘削された横穴墓の集合として認識できるこの纏りは、多くが同時期の2・3基の複数の存在を特徴とするものであり、他例と異なる。

即ち、この吉見百穴横穴墓群に窺知できる様相は、墓域を共有する被葬者集団内に9つの恐ら

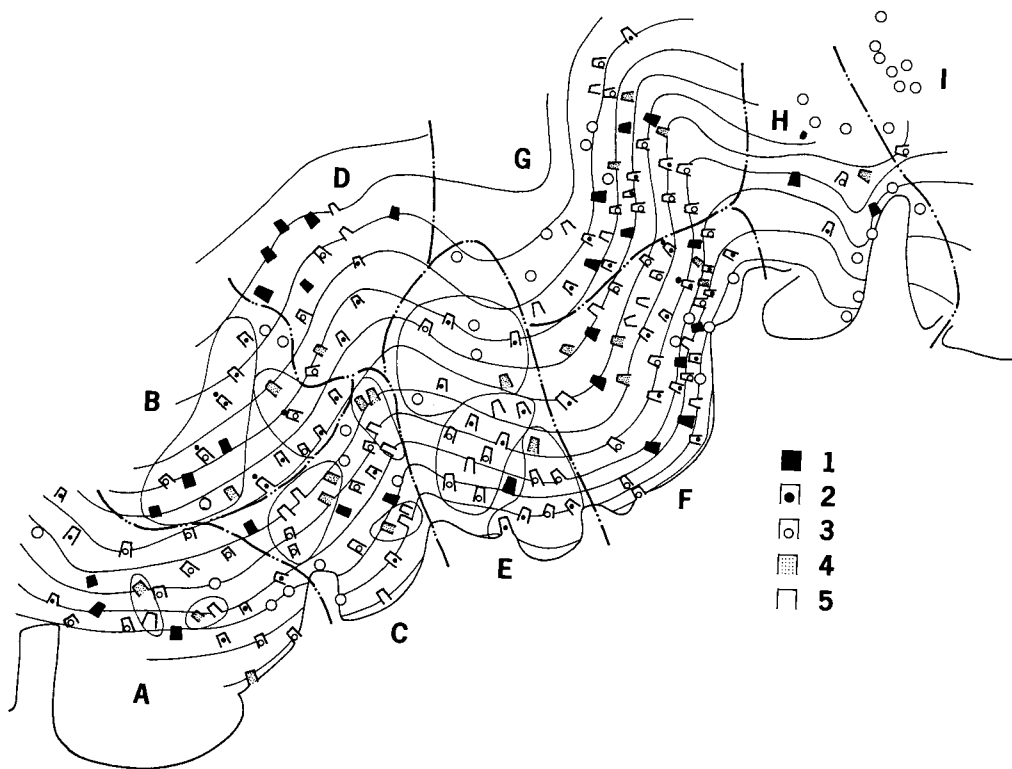


図11 吉見百穴横穴墓群全体図

くは血縁を紐帯とした小単位を想定することができ、初現期の6世紀の後半代以降7世紀代に至り4つの小単位では個別家族の分立を確認できるが、これは同時期に複数の横穴墓を造営するという点において集団内での有力な造営主体と認識することができるものである。一方その終末まで小単位内の個別の造営主体の墓域の明確でない支群も半数確認でき、これが群集墳としてⅢ類の類型を採らないものであるときに、支群の構成に明示されるこの二つの異なる様相は、地区の首長層による従属する存在としての横穴墓被葬者集団支配の一つの方策として、矛盾を内部で解消させた姿を窺知することができるものである。

## 6. 群集墳の分析

さて、群集墳は一般的にその副葬品を根拠として、武装した集団の墳墓として認識されている。横穴墓を群集墳の一類型とした場合これは果たして普遍妥当性を有する事実であろうか。更にまた丸山竜平の指摘する如く、群集墳は誰の為に誰に鋒先を向けた武装集団であったのであろうか。<sup>(115)</sup>ここでは、かかる問題の解明の一つの手段として、南武蔵を中心とする後期古墳よりの出土武器のうち鉄鏃を問題としてみたい。

近年における鉄鏃研究の主体は、地区別の共伴する型式の認識と編年問題であり、中に全国的視野での分類、各期の様式把握も呈示されているもののそれ以上ではなく、残された問題は極めて多い。<sup>(116)</sup>

一般に群集墳から出土する鉄鏃は、複数の埋葬によって集積された結果であり、これを埋葬ごとに識別できる例はまれである。従ってここでは個々の古墳からの出土総数を分析対象とする。問題とすべきは、一般に武装した階層の最下位に位置づけられる鉄鏃所有層が、群集墳のうちにどれ程を占めるかという点であり、南武蔵を含む東国の諸例167例の結果では、A～全体の3分2以上からすべての古墳よりの出土が確認できる例、B～全体の半数から3分の2まで、C～全体の3分の1から半数まで、D～全体の1割から3分の1まで、E～全体の1割以下、F～所有しない群集墳、の6類に区分することができる。<sup>(117)</sup>

更に、鉄鏃の所有数としての群集墳中の鉄鏃を出土した古墳の平均値では、最大の19.3から1.0本までとなる。これを群中の出土古墳数を勘案すると、10基の古墳から平均5本の出土が確認される例と、5基の古墳から平均10本の検出とは、群集墳よりの出土鉄鏃総数は等しくなる。鉄鏃の総数はその生産・供給体制を考慮すると、他の群集墳との相対的な意味において直属の首長層との関連を明示するものとして重要な意味を有するものと考えられるが、群集墳内における鉄鏃の保有率は被葬者集団内における規制とも考えられる。従って総数を問題とすると平均14～20本を占める1段階から1本も所有しない7段階に区分され、これと群集墳中の保有率を合わせると最大のA1から鉄鏃を所有しない群集墳としてのF7までに細かく区分できるが、実際の例ではA1・A2・A3・A4・B1・B3・B4・B5・C2・C4・C5・D2・D3・D

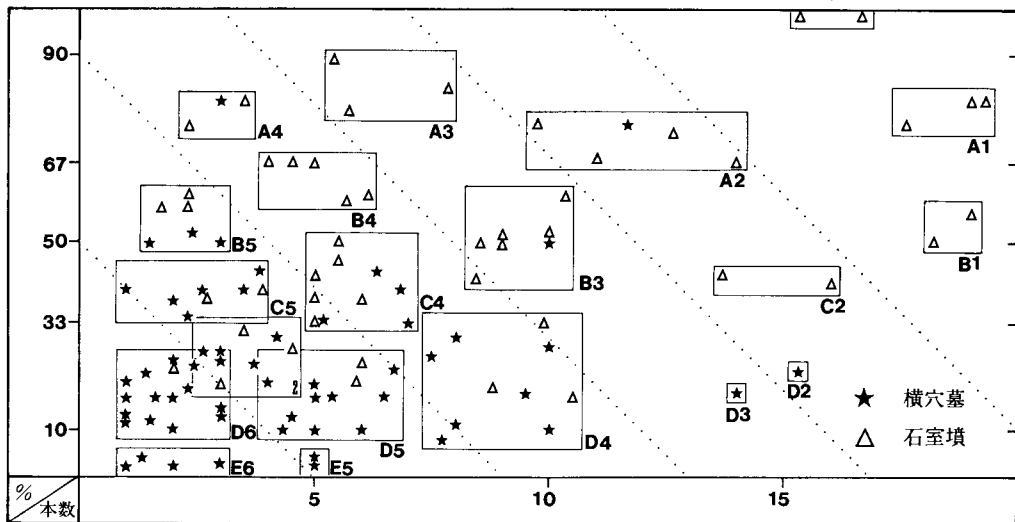


図12 鉄銕所有の類型

A 1

埼玉県東松山市・柏崎古墳群, 神奈川県相模原市・谷原古墳群, 東京都大田区・多摩川台古墳群, 港区・芝丸山古墳群, 東京都日野市・万蔵院古墳群, 千葉市・中原古墳群

A 2

岩手県矢巾町・狄森古墳群, 福島県白河市・観音山横穴墓, 埼玉県熊谷市・三ヶ尻林古墳群, 静岡県清水市・東久佐奈岐古墳群, 愛知県豊橋市・二本松古墳群

A 3

埼玉県児玉町・長沖古墳群, 静岡県岡部町・横添古墳群板沢支群, 愛知県日間賀島・北地古墳群

A 4

神奈川県川崎市・久地西前田横穴墓群, 静岡市・牧ヶ谷古墳群, 静岡市・堀ノ内山古墳群

B 1

茨城県協和町・丑塚古墳群, 千葉市東南部古墳群

B 3

群馬県榛名町・奥原古墳群, 群馬県赤堀村・地藏山古墳群, 群馬県高崎市・御部入古墳群, 群馬県前橋市・長久保古墳群, 埼玉県川本町・鹿島古墳群, 茨城県常陸太田市・幡山古墳群, 東京都世田谷区・岡本谷戸横穴墓群

B 4

群馬県沼田市・奈良古墳群, 埼玉県東松山市・西原古墳群, 静岡県藤枝市・南新屋古墳群秋合支群, 静岡県豊岡村・押越古墳群, 長野県塩尻市・二瀬ノ神古墳群

B 5

千葉県富津市・神宿横穴墓群, 神奈川県二宮町・諏訪脇横穴墓群, 静岡県浜松市・半田山古墳群, 長野市・長原古墳群, 長野県佐久市・長峯古墳群

C 2

千葉県成田市・公津原古墳群

C 4

群馬県赤堀村・峯岸山古墳群, 埼玉県美里町・塚本山古墳群, 東京都大田区・山王横穴墓群, 神奈川県川崎市・間際根横穴墓群, 神奈川県横浜市・長昌寺前横穴墓群, 神奈川県藤沢市・代官山横穴墓群, 静岡県藤枝市・瀬戸古墳群, 長野市・大室古墳群, 岐阜市・椿洞古墳群

C 5

埼玉県花園村・小前田古墳群, 千葉県市原市・西国古横穴墓群, 神奈川県横浜市・熊ヶ谷横穴墓群, 大場衛門谷横穴墓群, 川崎市・下作延中之橋横穴墓群, 神奈川県大和市・浅間神社西側横穴墓群, 神奈川県藤沢市・折戸横穴墓群, 静岡県島田市・水掛渡古墳群, 長野県松本市・安塚古墳群

D 2

茨城県常陸太田市・身隠山横穴墓群

D 3

東京都多摩市・中和田横穴墓群

D 4

宮城県三本木町・山畑横穴墓群, 混内山横穴墓群, 宮城県亘理町・雁田横穴墓群, 福島県白河市・郭内横穴墓群, 群馬県前橋市・荒砥二之堰古墳群, 千葉県市原市・岩横穴墓群, 神奈川県横浜市・市ヶ尾横穴墓群, 神奈川県秦野市・岩井戸横穴墓群, 山梨県一宮町・四ッ塚古墳群, 静岡県函南町・柏谷百穴横穴墓群, 静岡県藤枝市・原古墳群白砂ヶ谷支群,

静岡県森町・観音堂横穴墓群

D 5—1

岩手県江釣子村・五条丸古墳群、宮城県三本木町・青山横穴墓群、坂本館山横穴墓群、宮城県亘理町・田沢横穴墓群、茨城県日立市・千福寺横穴墓群、千葉県富津市・西山横穴墓群、東京都日野市・梵天山横穴墓群、神奈川茅ヶ崎市・代官山横穴墓群、静岡県藤枝市・原古墳群高草支群

D 5—2

岩手県江釣子村・猫谷地古墳群、宮城県石越町・山根前横穴墓群、群馬県粕川村・西原古墳群、神奈川県横浜市・浅間下横穴墓群、静岡県・伊庄谷横穴墓群、静岡県藤枝市・南新屋萩ヶ谷古墳群、静岡県浜松市・四ッ池古墳群、静岡県菊川町・篠ヶ谷横穴墓群、菊川町・大淵ヶ谷横穴墓群

D 6

宮城県中田町・白地横穴墓群、宮城県仙台市・善応寺横穴墓群、宮城県亘理町・桜小路横穴墓群、福島県東村・芥内横穴墓群、福島県須賀川市・治部池横穴墓群、千葉県富津市・向原横穴墓群、東京都町田市・能ヶ谷横穴墓群、神奈川県横浜市・東方横穴墓群、神奈川県川崎市・長者穴横穴墓群、下作延日向横穴墓群、神奈川県大磯町・愛宕山横穴墓群、愛宕山下横穴墓群、静岡県伊豆長岡町・大北横穴墓群

E 5

福島県双葉町・西宮下横穴墓群、千葉県茂原市・山崎横穴墓群

E 6

宮城県涌谷町・迫戸中野横穴墓群、福島県いわき市・小申田横穴墓群、福島県鹿島町・大窪横穴墓群、茨城県常陸太田市・幡山横穴墓群、千葉県大網白里町・瑞穂横穴墓群

F 7

宮城県三本木町・龍谷横穴墓群、宮城県仙台市・宗禅寺横穴墓群、愛宕山横穴墓群、宮城県亘理町・堤の内横穴墓群、袖ヶ沢横穴墓群、福島県楢葉町・北向横穴墓群、福島県双葉町・清戸廻横穴墓群、岩井廻横穴墓群、上廻横穴墓群、福島県鹿島町・糠塚横穴墓群、栃木県市貝町・長峰横穴墓群、茨城県勝田市・十五郎穴横穴墓群、茨城県日立市・赤羽横穴墓群、千葉県岬町・東前横穴墓群、千葉県多古町・高津原横穴墓群、埼玉県東松山市・桜山古墳群、埼玉県和光市・吹上原横穴墓群、東京都日野市・坂西横穴墓群、東京都三鷹市・御塔坂横穴墓群、御塔沢横穴墓、東京都世田谷区龜ヶ谷横穴墓群、大蔵町第1号横穴墓、大蔵町115番地横穴墓、玉川野毛町横穴墓、野毛町204番地横穴墓、野毛町青年の家横穴墓、砧小学校前横穴墓、西谷戸横穴墓群、等々力溪谷横穴墓群、中神明横穴墓群、下野毛岸横穴墓群、成城学園横穴墓群、不動橋横穴墓群、大田区久が原横穴墓群、上池上横穴墓群、桐ヶ谷横穴墓、ドリコノ坂横穴墓、嶺横穴墓、東京都新宿区・落合横穴墓群、神奈川県横浜市・熊ヶ谷東横穴墓群、中屋敷横穴墓、桂町横穴墓群、中居丸山横穴墓群、宮ノ前横穴墓群、下根横穴墓群、天ヶ谷横穴墓群、八千代田横穴墓群、高田町横穴墓、川崎市・下作延横穴墓群、蟹ヶ谷横穴墓群、鎌谷横穴墓群、夢見ヶ崎横穴墓、神奈川県厚木市・大畑横穴墓群、神奈川県座間市・鷹番塚横穴墓群、神奈川県大和市・下草柳横穴墓群、南善ヶ谷横穴墓群、神奈川県秦野市・欠の上横穴墓群、静岡県清水市・伏見古墳群、静岡県浜岡町・門屋横穴墓群蓮岡支群

4・D 5・D 6・E 5・E 6・F 7の19類型に分けることができる。しかし、この区分では群集墳の規模は考慮しておらず、A 1あるいはA 2などの高い保有率を示す群集墳は小規模なものが多という結果になっている。

従って、単に武装した集団の墳墓と認識される群集墳も、鉄鍬の保有率のみによってもその個性は様々であり、地区によりあるいは地域により異なった様相を明示するものということができる。鉄鍬保有率に窺われる最も大きな特徴は、横穴墓の保有率が高塚古墳よりも相対的に低いという点であり、これは群として1本も持たないF 7類型59例のうち57例までが横穴墓群であるという点に端的に示されている。

ここで南武蔵地域における例を見てみると、多摩丘陵地区では赤田古墳群の横穴墓群が、約3分の1の横穴墓より6～7本の鉄鍬の出土として総数80本ほどが検出されており、C 4類型としてこの地区の横穴墓では最大の数を誇る。この地区の他の横穴墓群では、熊ヶ谷横穴墓群が25基中の10基よりの出土としてC 5、これに隣接する熊ヶ谷東横穴墓群は7基で1本も出土しておらずF 7、市が尾横穴墓群では19基中の2基でD 4、大場衛門谷横穴墓群はC 5、カゴ山横穴墓群はD 6、上谷本・下根・天ヶ谷横穴墓群はF 7、東方横穴墓群は21基中の5基でD 6類型と確認できる。即ちここに窺われる様相は、それぞれ異なるタイプの横穴墓が小地区ごとに纏まって存在

する状況を明示するものであり、この地区の首長墓としての前方後円墳である三保杉沢古墳の27本という鉄鏃の数と比較すれば、鉄鏃保有状況に窺知できる個々の横穴墓群の位置づけは明瞭であろう。

この地区の首長墓としての石室墳と従属する集団の墳墓としての横穴墓の鉄鏃保有の差異は、多摩川南岸地区においても明瞭であり、第六天古墳の82本に対し、横穴墓は長者穴D 6、西前田A 4、間際根<sup>(119)</sup>C 4、中之橋C 5、作延・蟹ヶ谷<sup>(120)</sup>F 7となる。しかし、この地区においては、詳細は不明ながら津田山丘陵の平瀬川隧道際西横穴墓で20本、七面山北横穴墓で18本の鉄鏃の出土を窺知することができ、これらはいずれもこの地区の初現期の横穴墓と位置づけることが可能なものであり、群形成の端緒をなす一横穴墓に集中した特異な様相と理解できる。

この一横穴墓に集中する鉄鏃保有の状況は多摩川の対岸の荏原古墳群においても確認することができ、頭椎・円頭大刀に直刀5本、馬具、挂甲を出土した塚越第14号横穴墓からは鉄鏃117本以上、切石を用いた玄門構造を付設した岡本町横穴墓<sup>(121)</sup>からは円頭大刀と鉄鏃10本、同様の玄門構造の横穴墓で組合石棺を内蔵する猪鼻第2号横穴墓<sup>(122)</sup>よりは鉄鏃50本の出土が知られる。これらは南岸と同じく初現期に遡及する可能性のある横穴墓もあるものの、出土した須恵器から確実に展開期の所産と考えられる猪鼻第2号横穴墓なども知られ、装飾付大刀の出土などよりすれば従前の墳丘に従った厳格なる規制の、時期に従った弛緩の後の相対的な横穴墓被葬者の地位の上昇を明示する資料と考えることができよう。

しかし地区総体としては、首長墓としての前方後円墳である観音塚古墳からの鉄鏃97本の出土、支配者集団の墳墓としての多摩川台古墳群の内容の知られる4基から67本の出土としてのA 1類型に対し、多くの横穴墓はF 7類型としての副葬の認められないものであり、鉄鏃保有率に窺われる上下関係は明瞭である。

更に、多摩川上流域における横穴墓出土鉄鏃の状況も他地区と同じく類型を異にする、即ち個々に保有率が違う横穴墓群の集合を確認できるものである。

以上、南武蔵の群集墳に窺われる鉄鏃の所有状況は、そこに群集墳の個性即ち被葬者集団の性格の差異を表出し武装の状態を異にしており、鉄鏃を持たない例の大半は何等武器を所有しないという点を重視すれば、多くの横穴墓の被葬者は地位の表象として横穴墓を造営してはいるものの、地区の首長層に支配された開拓農民層と考えることができよう。

この高塚古墳と横穴墓の武器の所有における差異は房総地区においてより明瞭に窺うことができる。千葉市・東南部ニュータウン内の高塚群集墳<sup>(123)</sup>が63基中の35基の古墳から総数648本の鉄鏃の保有としてB 1類型、成田市・公津原古墳群<sup>(124)</sup>が総数112本でC 2類型に属するのに対し、茂原市・山崎横穴墓群<sup>(125)</sup>では38基中1基から5本が検出されたに過ぎず、大網白里町・瑞穂横穴墓群<sup>(126)</sup>では43基中1基から2本のみの確認である。勿論これ以外の小規模の横穴墓群にあってはより保有率の高い例も知られるものの、高塚古墳との格差は歴然としており、よく横穴墓の性格を明示するものといえることができよう。この様相は東北地方の横穴墓にも顕著であり、大半の横穴墓群は

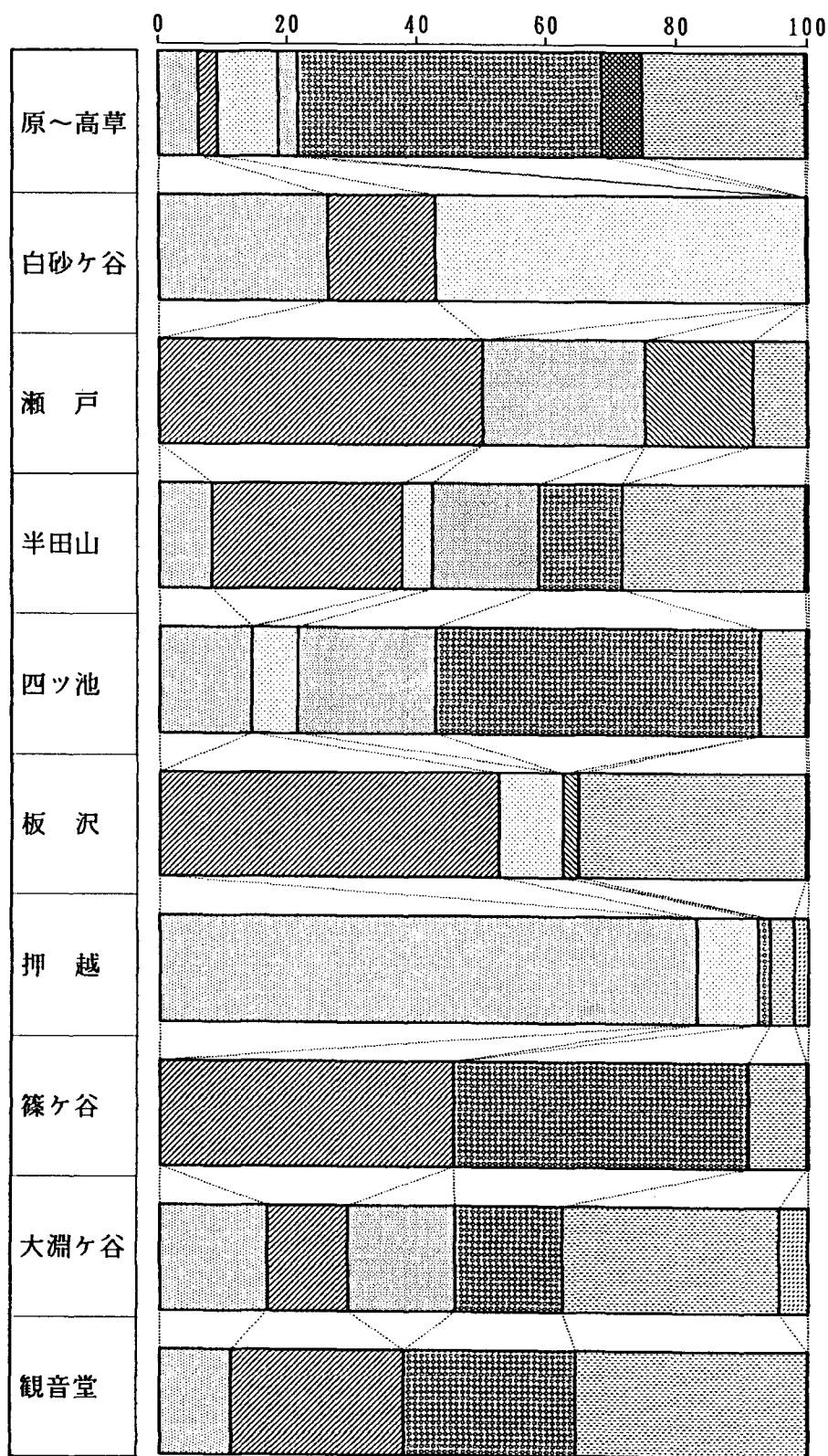


図13 東国主要古墳群出土，鉄鍬集成①

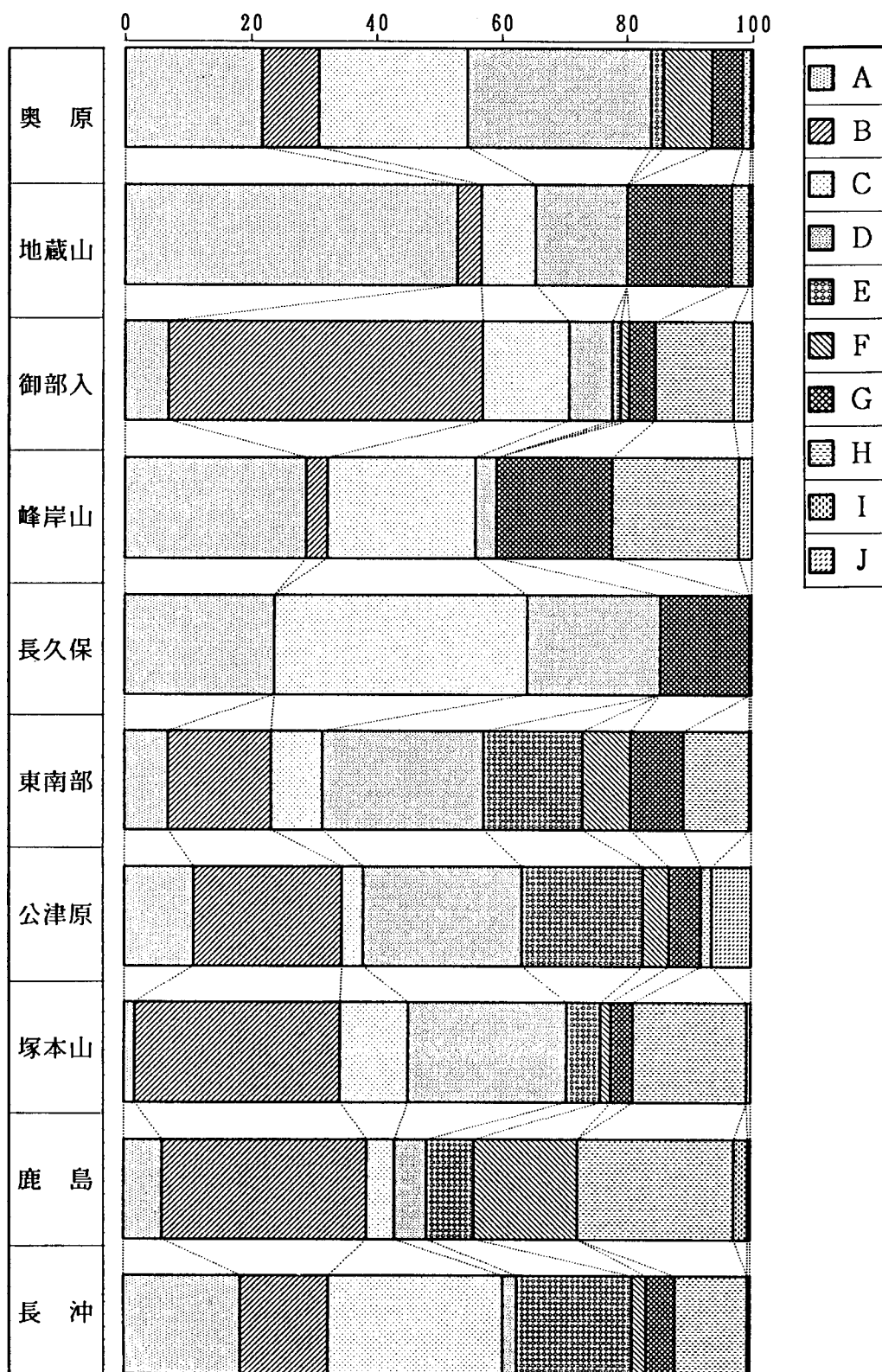


図14 東国主要古墳群出土，鉄鍬集成②



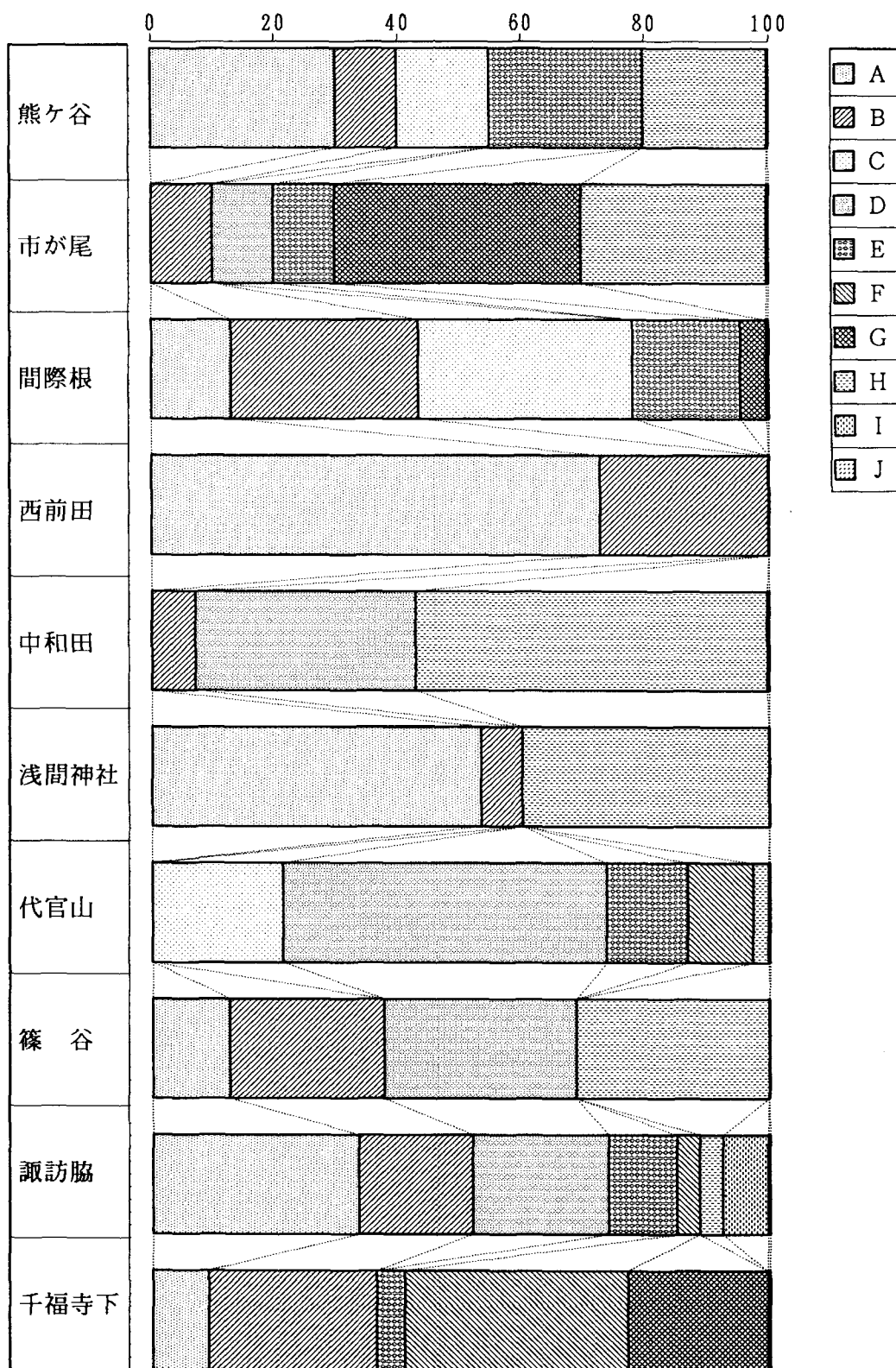


図15 横穴墓出土鉄鍔集成

武装したとはいいたいものである。

更に、鉄鏃を型式別にA～鏃箭、B～端刃鏃箭、C～片刃箭、D～端刃片刃箭、E～三角形、F～長三角形、G～無茎平根、H～有茎平根、I～飛燕、J～腸扶柳葉に区分し、群集墳ごとにその比率を見てみると、特に実戦用とされる尖根系と儀杖用の可能性の高い平根系の比率において異なる若干の様相を確認することができる。即ち、高塚群集墳にあっては、大きく8～9割が尖根系が占める例と6～7割を占める二つの様相を東海・関東地方の群集に確認できるが、南武蔵の横穴墓群では市ヶ尾横穴墓群の30%、中和田横穴墓群の43%と極端に尖根系の鉄鏃の比率の低い様相を窺うことができる。これは一つに埋葬儀礼に伴う鉄鏃の副葬という点も想定されるところであり、かかる事象は更に横穴墓被葬者集団の武装という点を軽視せしめるものである。

以上、群集墳における鉄鏃の保有率に窺われるところでは、一般に武装したとされる群集墳の被葬者集団も、画一的な様相ではなく個々に差異を有する状況を窺うことができ、高塚古墳に比し横穴墓の劣勢は否めないところである。更に地域的にも上野・北武蔵・房総地方の高塚群集墳に比して東海地方の諸例が劣っており、地域的特色を明示している。

この点は畿内地方の諸例と比較すると、また興味深いものとなる。しかし、畿内地方における群集墳は研究を主導してきたわりに実態の不明なものが多く、これが画一的見解を醸成し来たった要因の一つと考えられるところである。僅かに窺知できる例として、6世紀代に形成された奈良県天理市・石上豊田古墳群<sup>(127)</sup>では、26基中の16基からの116本の鉄鏃の検出としてB3類型と確認できるものであり、尖根系の占有率は83パーセントであり、東国に顕著な武装した被葬者を想定できる群集墳の様相に等しい。更に、大阪府高槻市・塚原古墳群<sup>(128)</sup>は6世紀中葉から7世紀の中葉にかけて造営された34基の内容が判明しており、ここでは7世紀の初頭までと、これ以降は大きく様相を異にしている。即ち、前者として確認できる16基中14基から110本の鉄鏃が検出されておりA3類型とされるのに対し、後者の年代が想定される12基では5基から17本の検出としてC5類型と認識できる。時期に従った武器副葬の通減現象と理解されるところであり、前方後円墳消滅後の時期に顕著な、律令体制下における人民からの武器の収公の先駆をなす形態としての半中央型武器・武具集中管理体制<sup>(129)</sup>の想定に合う。しかし、6世紀後半代に造営されたものと考えられている兵庫県小野市・高山古墳群<sup>(130)</sup>は28基中1基から2本の鉄鏃の出土としてE6類型、7世紀の所産年代が想定される大阪府・田辺古墳群では19基の古墳から何等の武器も検出されてはおらず、確かに7世紀以降の現象は認められるものの、東国と同じく類型を異にする群の地区別の集合も考えられ、等しく武装した集団を想定するには問題がある。

群集墳の一つの様相は、南武蔵地域の諸例あるいは下野中央部に顕著な如くに在地の首長墓と密接に関連して形成されたものと想定できる例である。しかし、既往の研究はこのような状況での形成とのみ位置づけられていたわけではない。むしろ畿内中央政権との密接な関連のもとに、在地の首長墓の衰退と反比例しての群集墳の盛行と考えられる場合が多かったものといえよう。<sup>(131)</sup>これは一つには対象とした地域の違いに基づく所ではあるものの、群集する古墳の形成の要因が

単純では無いことを物語るものということができます。

地域にあって在地首長に主導されて形成された武装した集団は、首長権力を構成する重要な存在として位置づけられるものの、これは古墳時代に普遍的な事象であり後期に顕在化する群集墳形成の要因とはならない。むしろ地域外の勢力と連携した武装集団に対抗するために形成されたものと考えられ、地域内における相互勢力の葛藤状況を窺知することができる。

即ち、東国の群集墳は従前研究の主体を成した“畿内主導型”の形成以外に、これら地域外勢力と対抗する為に“在地主導型”で形成された類型も考えられるところであり、両者の緊張状況が故の集団の武装と考えることができよう。しかし、南武蔵における様相は、遺跡の様相より内部的な発展による結果のみとは見なしがたいところもあり、かなりの部分の群集墳形成期における新勢力の入植を想定せしめるところであり、これが為の武装とも考えられる。

本稿を草するにあたり、吉田格先生をはじめ福田健司・松崎元樹両氏より多摩川台古墳群に関して種々有益な御教示を頂いた。末尾ながら記して謝意を表したい。(1989年10月稿)

#### 注

- (1) 後藤守一 「東京府下の古墳」『東京府史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第13冊 昭和11年  
穴沢味光・西岡秀雄 「田園調布宝来山古墳の研究」『史誌』第15号 昭和56年
- (2) 柴田常恵・森貞成 『日吉・加瀬』 昭和28年
- (3) 世田谷区教育委員会 『嘉留多遺跡・砧中学校7号墳』 昭和57年
- (4) 甘粕健・田中義昭ほか 「稲荷前古墳群発掘報告」『横浜市域北部埋蔵文化財調査報告書、昭和42年度』 昭和43年  
甘粕健 「稲荷前古墳群」『古代の都筑をまなぶ』 昭和56年
- (5) 日本窯業史研究所 『観福寺裏遺跡』 昭和61年
- (6) 水野順敏ほか 「虚空蔵山遺跡」『日本窯業史研究所年報』Ⅱ 昭和58年
- (7) 高津図書館友の会郷土研究部 『久地伊屋之免遺跡』 昭和62年
- (8) 池上悟 「古墳時代」『日野市史』通史編 1 昭和63年
- (9) 後藤守一 「荏原古墳群」『東京府史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第13冊 昭和11年
- (10) 田中新史 「御嶽山古墳出土の短甲」『考古学雑誌』第64巻第1号 昭和53年
- (11) 柴田常恵・保坂三郎 『日吉矢上古墳』 昭和18年
- (12) 八木契三郎 「共同備忘録(第12回)」『東京人類学会雑誌』第15巻第170号 明治33年
- (13) 岡本勇 「朝光寺原A地区遺跡第1次発掘調査概報」『横浜市域北部埋蔵文化財調査報告書、昭和42年度』 昭和43年
- (14) 坪井正五郎 「芝公園に存する大小古墳の性格とその年代」『東洋学芸雑誌』第220号 明治33年  
大塚初重・梅沢重昭 「東京都芝丸山古墳群の調査」『考古学雑誌』第51巻第1号 昭和40年
- (15) 飯塚武司 「東京都・神奈川県地域における埴輪編年」『埴輪の変遷』昭和60年
- (16) 大場磐雄 「多摩古代文化と帰化人」『西郊文化』第6号 昭和28年
- (17) 狛江市教育委員会 『狛江市の古墳(1)』 昭和54年
- (18) 飯塚武司 「東京都・神奈川県地域における埴輪編年」『埴輪の変遷』 昭和60年
- (19) 市原寿文 「武蔵国田園調布4丁目観音塚古墳発掘報告」『白山史学』第1号 昭和28年
- (20) 梅沢重昭ほか 「東京都大田区田園調布荏原古墳群第4号・第9号墳発掘調査報告」『武蔵野』第231・232合併号 昭和32年  
梅沢重昭ほか 「東京都大田区田園調布荏原古墳群第2号・第5号・第7号墳発掘調査報告」『武蔵野』第237号 昭和33年
- (21) 吉田格 「多摩川台古墳群をめぐって」『史誌』第28号 昭和63年
- (22) 東京都教育委員会 『都心部の遺跡』 昭和60年

- (23) 石野英・三木文雄 「横浜市瀬戸ヶ谷古墳」『日本考古学年報』3 昭和30年
- (24) 鈴木重信 「市域の古墳」『古代のよこはま』昭和61年
- (25) 日本窯業史研究所 「三保杉沢遺跡群」昭和54年
- (26) 甘粕健ほか 「横浜市西区軽井沢1号墳の調査」『昭和40年度日本考古学協会研究発表要旨』昭和40年  
甘粕健ほか 「全掘された前方後円墳～西区軽井沢古墳」『科学読売』昭和40年12月号 昭和40年
- (27) 飯塚卓二 「埼玉古墳群の出現と毛野地域政権」『群馬県埋蔵文化財調査事業団・研究紀要』第3号 昭和61年
- (28) 柴田常恵・森貞成 『日吉・加瀬』昭和28年
- (29) 八木槌三郎 「武蔵国八王子在の古墳」『東京人類学会雑誌』第189号 明治22年
- (30) 石野英 「横浜市磯子区室ノ木古墳調査記」『考古学雑誌』第25巻第6号 昭和10年
- (31) 池上悟 「平山遺跡第Ⅱ次調査」『日野市遺跡調査会年報』Ⅰ 昭和53年
- (32) 坂詰秀一編 『日野市史史料集』考古資料編 昭和59年
- (33) 多摩市教育委員会 『塚原古墳群』昭和63年
- (34) 坂本和俊 「袖無型石室の検討」『原始古代社会研究』第5巻 昭和54年
- (35) 柳沢一男 「北部九州における初期横穴式石室の展開」『九州考古学の諸問題』昭和50年  
「竪穴系横口式石室再考」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』昭和57年
- (36) 池上悟 「野州石室考」『立正大学文学部論叢』第88号 昭和63年
- (37) 三木文雄 「多摩村の古墳及横穴」『東京都文化財調査報告書』第3冊 昭和31年
- (38) 大塚初重 「東京都八王子市七ツ塚古墳」『日本考古学年報』第7号 昭和33年
- (39) 久保常晴 「川崎市加瀬山第3号墳発掘調査報告」『銅鐸』第8号 昭和27年
- (40) 池上悟 「東国における胴張り石室の様相」『立正史学』第47号 昭和55年
- (41) 埼玉県 『埼玉県史』資料編 2 昭和57年
- (42) 松本浩一 「横穴式石室における胴張りに関する考察」『古代学研究』第53号 昭和43年
- (43) 八王子市宇津木台遺跡調査会 『宇津木台遺跡群』Ⅱ 昭和58年
- (44) 国立市教育委員会 『下谷保1号墳』昭和61年
- (45) 後藤守一 「多西村カスミノの古墳」『東京府史蹟名勝天然記念物調査報告』第4冊 昭和2年  
「瀬戸岡古墳群」『東京都文化財調査報告書』第3冊 昭和31年  
大塚初重 「武蔵瀬戸岡における奈良時代墳墓」『駿台史学』第3号 昭和38年
- (46) 後藤守一 「板橋区志村古墳群」『東京府史蹟名勝天然記念物調査報告』第13冊 昭和11年
- (47) 東北新幹線赤羽地区遺跡調査会 『赤羽台・袋低地・舟渡』昭和61年
- (48) 桶川市教育委員会 『西台遺跡の発掘調査』昭和45年
- (49) 樋口清之・金子皓彦 「川崎市高津区馬絹古墳発掘調査概報」『川崎市文化財集録』第8集 昭和47年
- (50) 石川正之助 「宝塔山古墳」『群馬県史』資料集 3 昭和56年
- (51) 秋山日出雄 「檜隈大内陵の石室構造」『橿原考古学研究所論集』第5冊 昭和54年
- (52) 池上悟 「横口式石槨考」『立正大学文学部論叢』第79号 昭和59年
- (53) 池上悟 「東国横口式石槨考」『宗教社会史研究』Ⅱ 昭和60年 立正大学史学会
- (54) 石野英 「橘樹郡宮前村梶ヶ谷古墳調査記」『神奈川県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第3輯 昭和10年
- (55) 川崎市教育委員会 『影向寺遺跡発掘調査概報』昭和50年  
『影向寺文化財総合調査報告書』昭和56年  
『影向寺遺跡第2次発掘調査報告書』昭和61年
- (56) 赤星直忠 『鎌倉市史』考古編 昭和34年
- (57) 坪井正五郎 「埼玉県横見郡黒岩村及び北吉見村横穴探究記(上)・(下)」『東京人類学会雑誌』第2巻第19・22号 明治20年  
金井塚良一 『吉見百穴横穴墓群の研究』昭和50年
- (58) 赤星直忠 「相州鴨居の横穴」『考古学雑誌』第15巻第8・9・11号 大正14年
- (59) 川崎市教育委員会 『川崎市井田伊勢宮金掘横穴墓群第7号穴調査書』昭和31年
- (60) 戸田哲也ほか 『東方横穴墓群発掘調査報告書』昭和60年

- 呉地英夫 『東方横穴墓群第2次発掘調査報告書』 昭和61年
- (61) 横浜市埋蔵文化財調査委員会 『七石山遺跡発掘調査報告書(1)・(2)』 昭和44・46年
- (62) 小松真一 「武蔵国南部の横穴群について」『人類学雑誌』第37巻第6号 大正11年
- (63) 高津図書館友の会郷土研究部古代班 『考古たちばな』第5・6合併号 昭和41年
- (64) 池上悟 「古墳出土の須恵器～フラスコ形提瓶～」『立正大学人文科学研究所年報』第23号 昭和60年
- (65) 池上悟 「東国横穴墓の一様相」『立正史学』第52号 昭和57年
- (66) 甘粕健・田中義昭 「市ヶ尾古墳群の発掘」『横浜市史』資料集21 昭和57年
- (67) 池上悟 「小黒谷横穴群の調査」『小黒谷遺跡発掘調査概報』 昭和48年
- (68) 樋口清之・金子皓彦 「川崎市多摩区早野横穴古墳発掘調査報告」『川崎市文化財集録』第9集 昭和49年
- (69) 東原信行 「川崎市最北西部谷本川流域の横穴古墳群」『川崎市文化財集録』第20集 昭和59年
- (70) 鶴川遺跡群発掘調査団 『鶴川遺跡群』 昭和47年
- (71) 後藤守一・梅沢重昭 「多摩丘陵における古墳及び横穴の調査」『南多摩文化財総合調査報告』第1冊 昭和36年
- (72) 池上悟 「東北南部における横穴初現についての一試考」『南奥古文化』創刊号 昭和52年
- (73) 竹石健二編 『川崎市久地西前田横穴墓群発掘調査報告書』 昭和53年
- (74) 日本窯業史研究所 『市ヶ尾・川和地区内遺跡群』 昭和54年
- (75) 杉山林継 「大蔵1号墳」『世田谷区史料』考古編 昭和50年
- (76) 伊東秀吉 「川崎市下作延日向横穴古墳調査報告」『川崎市文化財調査集録』第2集 昭和41年
- (77) 菊池義次 「古墳時代文化」『大田区史』資料編・考古Ⅰ 昭和44年
- (78) 世田谷区教育委員会 『下野毛岸横穴墓群』 昭和57年
- (79) 久保常晴編 『日野市坂西横穴墓』 昭和51年
- (80) 池上悟 『横穴墓』考古学ライブラリー6 昭和55年
- (81) 池上悟 「出雲における切石使用横穴式石室の一類型について」『立正大学文学部考古学研究室彙報』第22号 昭和57年
- (82) 田村良照 「鶴見川流域及び多摩川下流域における横穴墓の様相」『川崎市内における横穴墓群の調査』昭和61年
- (83) 山崎直方 「武蔵国橋樹郡大曾根太尾二村の横穴」『東京人類学会雑誌』第2巻第21号 明治20年
- (84) 伊東秀吉 「川崎市生田長者穴古墳群調査報告」『川崎市文化財調査集録』第5集 昭和44年
- (85) 緑区史編集委員会 『緑区史』資料編第2巻 昭和61年
- (86) 常陸太田市教育委員会 『幡山遺跡発掘調査報告』 昭和52年
- (87) 目黒吉明・玉川一郎 「栄内古墳群」『母畑地区遺跡発掘調査報告』Ⅲ 昭和54年
- (88) 緑区史編集委員会 『緑区史』資料編第2巻 昭和61年
- (89) 立正大学文学部考古学研究室 『武蔵・熊ヶ谷横穴墓群』 昭和59年
- (90) 立正大学文学部考古学研究室 『武蔵・熊ヶ谷東遺跡』 昭和61年
- (91) 後藤守一・梅沢重昭 「多摩丘陵における古墳及び横穴の調査」『南多摩文化財総合調査報告』第1冊 昭和36年
- (92) 伊東秀吉 「川崎市の古墳(2)」『川崎市文化財調査集録』第4集 昭和43年
- (93) 平子順一 『上郷深田遺跡発掘調査概報』 昭和63年
- (94) 池上悟 「横穴墓の被葬者と性格論」『論争・学説日本の考古学』5 古墳時代 昭和63年
- (95) 東北新幹線赤羽地区遺跡調査会 『八幡原遺跡の発掘』 昭和59年
- (96) 日本大学文理学部史学研究室 『吹上原横穴墓群』 昭和60年
- (97) 西岡秀雄 「往原台地における先史及び原史時代の遺跡遺物」『考古学雑誌』第26巻第5号 昭和11年
- (98) 杉山林継 「大蔵1号墳」『世田谷区史料』考古編 昭和50年
- (99) 茂木雅博・杉山林継 「殿山遺跡」『世田谷区史料』考古編 昭和50年
- (100) 桜井清彦 「喜多見稲荷塚古墳」『新修世田谷区史』付編 昭和37年
- (101) 大塚初重 「武蔵瀬戸岡における奈良時代墳墓」『駿台史学』第3号 昭和38年
- (102) 池上悟 「南武蔵・多摩川流域における横穴式石室の導入と展開」『物質文化』第39号 昭和57年

- (103) 和田哲 『経塚下遺跡』 昭和52年
- (104) 和田哲 『東京都昭島市田中前浄土古墳』 昭和54年
- (105) 坂詰秀一・池上悟 「東京都多摩市中和田横穴墓群の調査」『考古学ジャーナル』第130号 昭和51年
- (106) 坂詰秀一編 『日野市梵天山横穴墓』 昭和48年
- (107) 白石太一郎 「畿内の大型群集墳に関する一試考」『古代学研究』第42・43号 昭和41年
- (108) 水野正好 「雲雀山東尾根中古墳群の群構造とその性格」『古代研究』第4号 昭和49年
- 広瀬和雄 「群集墳論序説」『古代研究』第15号 昭和53年
- (109) 野上丈助 「群集墳研究の一分析視角について」『考古学叢考』中巻 昭和63年
- (110) 花田勝広 『田辺古墳群・墳墓群発掘調査概要』 昭和62年
- (111) 池上悟 「横穴墓掘削企画と群構成」『武蔵・熊ヶ谷横穴墓群』 昭和59年
- (112) 高橋奈津子 「出土人骨よりみた山陰における横穴墓被葬者について」『島根県考古学会誌』第5号 昭和63年
- (113) 池上悟 「横穴墓掘削企画と地域性」『武蔵・熊ヶ谷東遺跡』 昭和61年
- (114) 日田市教育委員会 『久慈千福寺下横穴墓群』 昭和60年  
『千福寺下横穴墓群第2次調査報告』 昭和61年
- (115) 丸山竜平 「群集墳の性格論争」『論争・学説日本の考古学』5 古墳時代 昭和63年
- (116) 小森哲也 「栃木県内古墳出土遺物考(1)」『栃木県考古学会誌』第8集 昭和59年
- 白井久美子 「東国後期古墳分析の一視点」『千葉県文化財センター研究紀要』第10号 昭和61年
- 飯塚武司 「後期古墳出土の鉄鏃について」『東京都埋蔵文化財センター紀要』Ⅴ 昭和62年
- (117) 杉山秀宏 「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第8冊 昭和63年
- (118) 佐藤安平 『上谷本第2地区横穴古墳群調査報告書』 昭和46年
- (119) 玉川文化財研究所 「間際根横穴墓群発掘調査報告書」『川崎市内における横穴墓群の調査』昭和61年
- (120) 玉川文化財研究所 「蟹ヶ谷横穴墓群発掘調査報告書」『川崎市内における横穴墓群の調査』昭和61年
- (121) 世田谷区史編纂室 『東京都世田谷区岡本町横穴古墳調査報告』 昭和34年
- (122) 森本六爾・谷木光之助 「武蔵南部における特色ある横穴(上)・(下)」『中央史壇』第15巻第5・11号 昭和2年
- (123) 千葉県文化財センター 『東南部ニュータウン』1・4・8・10・11・13・15・16 昭和50・52・54・56・57・59・60年
- (124) 千葉県企業庁 『公津原』 昭和50年
- (125) 千葉県文化財センター 『山崎横穴群』 昭和57年
- (126) 山武郡南部地区文化財センター 『瑞穂横穴群』 昭和61年
- (127) 奈良県教育委員会 『天理市石上・豊田古墳群Ⅰ』 昭和50年  
奈良県立橿原考古学研究所 『天理市石上・豊田古墳群Ⅱ』 昭和51年
- (128) 高槻市史編纂委員会 『高槻市史』第6巻 考古編 昭和48年
- (129) 藤田和尊 「古墳時代における武器・武具保有形態の変遷」『橿原考古学研究所論集』第8冊 昭和63年
- (130) 小野市教育委員会 『高山古墳群調査報告書』 昭和49年
- (131) 新納泉 「装飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』第30巻第3号 昭和58年

(立正大学文学部 国立歴史民俗博物館特定研究協力者)

IKEGAMI Satoru

Though some tumuli with triangular-rimmed mirrors with divinity and animal design from the early Tumuli Period and some with armor from the middle Tumuli Period are known to exist, the main feature of tumulus culture in the southern Musashi region is the existence of group tumuli from the later Tumuli Period, and particularly the intensive construction of cave-type graves.

At this later stage of the period, the construction of tumuli finally became possible throughout the area. From surveys on the remains of ancient communities, it can be understood that the construction of cave-type graves was not the result of stable development in the region. Rather, the group tumuli were a boom which expanded suddenly. In addition, individual cave-type graves did not construct randomly, but were constructed as part of a group with the mound grave, which has a stone burial chamber and is considered to be the grave of a regional chief. The group tumuli with stone burial chambers, which constructed in small numbers in a limited area, can be assumed to be the graves of an influential group which was in a leading position and directly supported the regional chief. These group tumuli are to be strictly distinguished from the cave-type graves.

In general, the group tumuli in the provinces are mostly taken to have a relation to the decline of the graves of regional chiefs. This interpretation, on its own, is too simple to lead to the solution of new problems. Group tumuli can be classified according to the factors leading to their construction; they can be divided largely into those arising from external factors, and those where the region's internal factors should be considered. They can be further classified according to various features, including their location, burial facilities, and burial goods.

Group tumuli are generally considered to be the graves of armed groups. However, the state of excavation of weapons from cave-type graves, which are those mainly found in group tumuli not only in the southern Musashi area but also in the extensive areas of Tôgoku (eastern Japan), is very different from that of the group tumuli with stone burial chambers. Of course, iron arrowhead, a typical example of weapons, have not been excavated from all group tumuli with stone burial chambers; but they have not been excavated from many other cave-type graves in eastern Japan. The arrowheads excavated from such graves are very different from those of the mound grave, which expressly indicates a significant gap between the ruling positions of those buried.